

# 桃生田前遺跡 下富前遺跡

—富地区県営担い手育成ほ場整備事業に係る発掘調査報告書—

平成12年3月

宮城県瀬峰町教育委員会  
宮 城 県 瀬 峰 町

# 桃生田前遺跡 下富前遺跡

— 富地区県営担い手育成ほ場整備事業に係る発掘調査報告書 —

## 発刊の辞

現在、瀬峰町には71ヶ所の埋蔵文化財の存在が知られています。これらは、縄文時代から近世まで私たちの祖先が刻んできた歴史を具体的に解明することができるかけがえのないものであります。このような文化遺産を保存するとともに、後世に伝えることは私たちにとって重大な責務であると考えております。

しかしながら、これらの遺跡は私たちが生活する土地に残されているものであるため、種々の開発行為と大きな関わりをもつことも事実であります。埋蔵文化財は地域の歴史を解明するうえで貴重な歴史資料であり、また、私たちの祖先がどのような生活をしていたのかを実際に目で見ることができるだけでなく、地域の将来を考えるうえでも多くの示唆を与えてくれるものであります。瀬峰町教育委員会では、昭和50年代初め頃より、埋蔵文化財の保護に努めてまいりました。今後、これらの遺跡の保存に努めるとともに活用をはかりたいと考えております。

さて、今回、本書に収録するのは平成9年12月及び平成11年4月から6月にかけて発掘調査を実施した桃生田前遺跡と下富前遺跡です。外周溝をもつ竪穴住居跡など奈良・平安時代の遺構とともに中近世の遺構・遺物を検出することができ、地域の歴史を考えるうえで貴重な資料を提供してくれました。また、町内では初見となる縄文時代前期の土偶など貴重な発見がありました。

最後になりましたが職員の派遣をしていただいた宮城県教育庁文化財保護課、宮城県建築土木事務所等の諸機関や研究者の方々からは種々ご高配を賜りました。また、現地で協力をいただいた多くの方々に感謝いたします。ここに関係各位に対し慎んで敬意を表するとともに、今後、益々皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願いし、発刊のあいさつといたします。

平成12年3月

瀬峰町教育委員会 教育長 及川秀美

# 目 次

発刊の辞	
目 次	
調査要項	
例 言	
I . 遺跡の位置と地理的・歴史的環境..	1
1 . 遺跡の位置と地理的環境..	1
2 . 遺跡の歴史的環境..	1
II . 調査経過..	4
III . 桃生田前遺跡..	6
1 . 検出された遺構と遺物..	6
2 . 穴住居跡と出土遺物..	6
3 . 挖立柱建物跡と出土遺物..	23
4 . 井戸跡と出土遺物..	29
5 . 土塙と出土遺物..	31
6 . 溝跡と出土遺物..	34
7 . 表土、その他の出土遺物..	34
8 . 考 察..	39
IV . 下富前遺跡..	45
1 . 検出された遺構と遺物..	45
2 . 穴住居跡と出土遺物..	45
3 . 挖立柱建物跡と出土遺物..	45
4 . 井戸跡と出土遺物..	50
5 . 溝跡と出土遺物..	50
6 . 土塙と出土遺物..	53
7 . 表土及び遺構外出土遺物..	54
8 . まとめ..	56
V . まとめ..	58
引用参考文献..	59
写真図版	

## 調査要項

1. 遺跡名 桃生田前遺跡（遺跡登録番号：46046）  
下富前遺跡（遺跡登録番号：46047）
2. 所在地 宮城県栗原郡瀬峰町大里字富桃生田29-1  
宮城県栗原郡瀬峰町大里字富下富前110、111-1、111-2、130-1
3. 調査面積 桃生田前遺跡 約1,300m<sup>2</sup>  
下富前遺跡 約 780m<sup>2</sup>
4. 調査期間 確認調査 平成7年4月15日～平成7年4月17日  
事前調査 平成9年12月8日～平成9年12月27日  
平成11年4月12日～平成11年6月9日
5. 調査主体者 瀬峰町教育委員会 教育長 及川秀美
6. 調査員 瀬峰町教育委員会 社会教育課 阿部正光（平成9年度まで）  
宮城県教育庁文化財保護課 佐藤則之、村田晃一、菅原弘樹、  
岩見和泰、茂木好光、伊藤 裕  
瀬峰町教育委員会 社会教育課 安達訓仁（平成11年度）
7. 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課
8. 地権者 遠藤喜徳、大場次郎、星 芳美、山田忠重
9. 調査参加者 飯塚志求子、飯塚緋佐子、飯塚義則、伊東よし子、小野寺きよ子、  
小野寺敬介、坂元幸生、佐々木和夫、佐々木尚見、佐々木春雄、  
菅原正臣、鈴木 茂、高橋一正、高橋甲吾、高橋正昭、藤田昭利、  
柳沢うしゑ、幸田信生  
成田美津子、前澤香織

## 例　　言

1. 本書は瀬峰町富地区県営担い手育成ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 土層や土器の色調表示については『新版標準土色帖』20版（小山・竹原：1990）に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考とした。
3. 桃生田前遺跡では点1（国土座標第X系X=-150123.500、Y=20424.537）を原点とし、点2（X=-150123.537、Y=20463.523）を視準し、下富前遺跡では点1（X=-150124.245、Y=20829.300）を原点とし、点2（X=-150193.540、Y=20836.735）を視準し、これを基準線として3mグリッドを組んで平面図を作成した。なお、この基準線の南北軸はそれぞれN-1°30' - E、N-19°45' - E傾いている。
4. 図中にある方位は真北を表している。
5. 遺構の縮尺は竪穴住居跡は1/60、その他は1/100を基本とし、遺構断面図は1/60に統一し、スケールを添えた。また、遺物のスケールは1/3に統一した。なお、写真図版の縮尺は任意である。
6. 第2図で用いた地図は、建設省国土地理院長の承諾を得て、同院発行の1/25,000地形図を複製したものである。（承認番号 平12東複第266号）
7. 発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々よりご指導、ご助言をいただきました。  
宮城県教育庁文化財保護課、宮城県築館土木事務所、瀬峰町ほ場整備推進室、古川市教育委員会、進藤秋輝、加藤道男、真山悟、阿部博志、山田晃弘、佐藤則之、村田晃一、菅原弘樹、須田良平、岩見和泰、茂木好光、伊藤裕（宮城県教育庁文化財保護課）及川規（東北歴史博物館）、佐藤敏幸（矢本町教育委員会）、佐藤信行（日本考古学協会会員）、佐藤正人（尚絅女学院）、鈴木勝彦（古川市教育委員会）、千葉孝弥（多賀城市埋蔵文化財調査センター）
8. 本遺跡の調査成果については、平成11年度宮城県遺跡調査成果発表会でその内容の一部を公開しているが、これと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。
9. 調査によって得られた資料・記録は、すべて瀬峰町教育委員会で保管している。
10. 本書の執筆・編集は調査員全員による協議のち、瀬峰町教育委員会社会教育課主事安達訓仁が行った。

## I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県の北西部に位置する栗原郡は岩手、秋田両県と境を接している。瀬峰町はその栗原郡の中でも東南端に所在し、宮城県西部を南北に貫く奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけてのびる北上高地とに挟まれた仙北平野低地帯のうち、北上川流域右岸の一角に位置している。

ここは奥羽山脈からしだいに標高を減じながら南東方向に連なる派生低丘陵のほぼ末端部分に当たり、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、内沼、長沼、蕪栗沼が群在する。中でも、蕪栗沼はかつて当湖沼地帯最大の水域を有していたが、江戸時代の新田開発、さらには近年の排水・開田事業によって、現在ではその旧状をほとんど止めいないものの、瀬峰町を貫流する瀬峰川、小山田川、萱刈川の遊水池として、当町の東南部に隣接している。

桃生田前遺跡及び下富前遺跡は、瀬峰町を東西に横切る緩やかで、低平な4つの丘陵中、中央部の標高約30m前後の寺沢丘陵の南面、小山田川左岸の微高地に位置している。標高は約6~7mと低く、現在は田地、畑地、宅地として使用されている。昭和30年代の開田工事により旧地形を確認す

ることはできないが、下富前遺跡の中央付近がやや高く、周囲はほぼ平坦である。昭和22年米軍撮影空中写真及び旧版地形図などでは島状の微高地が寺沢丘陵沿いに確認される。この微高地は埋没した丘陵の頂部が島状に残存したものと考えられる。また、標高の低い地点には小山田川旧河川が存在する可能性が高い。

地質的に見ると、これらの遺跡は礫岩、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる鮮新世：瀬峰層が基盤をなし、その上には礫岩と凝灰岩から構成される更新世：高清水層、さらに最上部には第四紀：中里火山灰が厚く堆積しており、丘陵上に所在する町内の諸遺跡とほぼ同じ様相を呈している。



第1図 瀬峰町の位置

### 2. 遺跡の歴史的環境

瀬峰町では丘陵を中心に多くの遺跡が分布している。ここでは、これまでの調査、研究を踏まえ遺跡周辺の古墳時代後期から近世にかけての歴史的環境を記述する。

古墳時代後期の遺跡としては泉谷館跡、民生病院裏遺跡、三代遺跡が知られている。昭和61・62年度の2ヶ年にわたって調査が実施された泉谷館跡（阿部・赤沢・佐藤：1987）からは、11軒の住居跡が検出され、栗田式期の土器とそれにほぼ併行すると考えられる関東地方鬼高式期の土器が出土している。なお、仙台市都山遺跡（木村・長島：1983ほか）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川：1982）などでは、7世紀後半から8世紀前半にかけての関東系の土器が相次いで出土しているが、

泉谷館跡出土の関東系土器の年代は概ね、7世紀前半と考えられ、それらに先行する段階のものとして注目を集めている。三代遺跡（阿部：1983）からは、粟田式の中でも新しい段階に属する資料が得られている。以上、古墳時代の遺跡の概要を述べたが、いずれも蕉栗沼、もしくは、それに流入する小山田川を間近に望める丘陵上に位置している。よって、当時、既に小山田川の土砂運搬作用によって徐々に冲積化しつつあった旧蕉栗沼縁辺部において、遺跡ごとに水田經營が展開されていたと推定される。なお、関東系土師器に象徴される関東地方との交流経路については、当町域の地理的状況から陸路より、むしろ、旧蕉栗沼から追川、北上川を経て太平洋に通じる海路を考えた方が妥当と思われる。

瀬峰町で遺跡の数が最も多いのは奈良・平安時代で、49遺跡を数えることができる。桃生田遺跡、桃生田前遺跡、下富前遺跡は沖積地を望む微高地に立地する。現在までのところ、岩石Ⅰ遺跡、大境山遺跡、寺沢丘陵東端に位置する長者原Ⅱ遺跡、民生病院裏遺跡、下藤沢Ⅱ遺跡、下藤沢Ⅲ遺跡、清水山Ⅰ遺跡について発掘調査が実施されている。一連の調査によって、多数の住居跡と豊富な遺物が発見されており、宮城県北部における当時の集落構成を考えるうえで良好な資料を提供している。即ち、35,000m<sup>2</sup>を調査し、23軒の住居跡が検出された大境山遺跡（阿部・赤沢：1983）では、各住居が適度に散在する現象が顕著に認められているが、こうした傾向は、前述の遺跡においても認めることが出来るものである。宮城県北部における集落の一タイプとして抽出されるものであろう。一方、集落以外の遺跡はほとんど確認されておらず、藏骨器が出土した蒲盛遺跡（阿部・赤沢：1984）が墓制に関する遺跡として知られる程度である。

中世の城館跡は藤沢館跡などがあげられる。瀬峰川沿いの丘陵上に構築された単郭式の小規模なものである。下富前遺跡（佐々木・阿部：1982、本書所収）からは、14世紀初め頃の龍泉系青磁皿の破片が採集されている。また、荒町遺跡（佐藤信行：1976、1984）から14世紀初め頃の古瀬戸壺の肩部破片、16世紀代の瀬戸あるいは美濃の大窯産と考えられる灰釉皿の口縁・体部破片が出土している。現在までのところ、中世の所産と考えられる塙には泉谷館跡（阿部・赤沢・佐藤：1987）から検出された東西14m、南北15mの方形にめぐる溝がある。堆積土の状況から、溝で囲まれた空間には当初、マウンドがあったと推定されている。青磁大形花瓶の体部破片、築館町熊狩窯（工藤・藤沼ほか：1979）製品と考えられる桃口縁部、体部破片が出土し、鎌倉時代中期から後期にかけての宗教的な壇であると考えられる。その他に經塙跡と推定される經壇遺跡、鎌倉時代の和鏡が出土した寺沢遺跡が知られている。なお、板碑については大正年間、20数基あることが知られていた（鈴木玄雄：1922）が、近年、破損したり、または所在地不明になっているものもあり、現在では18基確認されているに過ぎない。

現在の瀬峰町は、近世においては奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には、栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道（高清水宿～佐沼宿～登米宿）の宿駅、瀬嶺宿が設置された。この瀬嶺宿の西方2.5km、藤沢村の寺沢地内と富村の北ノ沢地内を横切る佐沼街道には、一里塚が保存されており、交通史上、貴重な遺構である。

泉谷館跡は、仙台藩士、橋本氏（知行高80貫380文）の在郷屋敷である。昭和61・62年度にかけ

## I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

て発掘調査が行われ、数棟の掘立柱建物跡や西門跡、塙跡などが検出された（阿部・赤沢・佐藤：1987）。中村の荒町地区には、除と呼ばれる所がある。仙台藩士、蟻坂氏の在郷屋敷で、寛永21年（1644年）所替となるまで居住したと伝えられる。町内には多数の塙が知られているが、確実に江戸時代と分かるものとしては、佐沼街道の一里塙、諏訪原経塙、清林塙、それに発掘調査によって盛土を伴う塙であることが確かめられた下藤沢II遺跡の塙群（阿部・赤沢・佐藤：1988）及び下藤沢III遺跡の塙群をあげることができるだけで、その大部分は所属年代が未だ明らかにされていない。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	王 墓 漢 跡	塙・包合地	奈良・平安・中世(?)	26	杉 墓 漢 跡	塙	中世・近世	46	桃生田前遺跡	集落	奈良・平安・中世
2	四 ツ 塙 漢 跡	塙・包合地	奈良・平安・中世(?)	27	下藤沢II遺跡	集落	奈良・平安・中世	47	下富前遺跡	包合地	奈良・平安・中世
5	伊 劍 室 漢 跡	塙・包合地	縦文・奈良・平安・中世	28	奥 谷 漢 跡	集落	奈良・平安・中世	48	舟舟ヶ崎遺跡	集落	縦文・奈良・平安
6	藤 沢 漢 跡	城	中世	29	除 隅 漢 跡	包合地	奈良・平安	49	中三代遺跡	集落	奈良・平安
7	殿 上 漢 跡	城	縦文・中世	30	旗 塙 漢 跡	包合地	奈良・平安・中世・近世	50	長 横 漢 跡	包合地	奈良・平安
11	的 塙 山 漢 跡	包 合 地	縦文・奈良・平安	31	吉 塙 漢 跡	塙	中世・近世	56	五輪堂山遺跡	集落	奈良・平安
12	古 塙 漢 跡	城	縦文・中世	32	清水山I遺跡	集落	奈良・平安	59	横 森 漢 跡	包合地	奈良・平安
14	空 墓 漢 跡	包 合 地	縦文(?)	33	下藤沢I遺跡	集落	奈良・平安	60	ホイト遺跡	塙	中世・近世
15	寺 山 漢 跡	包 合 地	縦文・物語(?)	34	坂ノ下道I遺跡	集落	縦文・奈良・平安	61	北ノ沢遺跡	包合地	奈良・平安
16	砂 田 漢 跡	包 合 地	奈良・平安	35	二ッ谷漢跡	集落	奈良・平安	62	清水山II遺跡	塙	中世・近世
17	岩 石 I 漢 跡	集落跡	塙(?)	36	民衆病院裏遺跡	集落	奈良・平安	64	岩石II遺跡	包合地	縦文(?)
18	下 山 漢 跡	包 合 地	古墳・奈良・平安	37	八 墓 前 漢 跡	塙	中世・近世	65	寺 云 漢 跡	集落跡	奈良・平安・中世・近世
19	三 代 漢 跡	包 合 地	縦文・奈良・平安	38	長者原II遺跡	集落	奈良・平安	66	瀧 田 漢 跡	火葬塙	奈良・平安
20	荒 町 漢 跡	包 合 地	縦文・奈良・平安・中世	39	一本松I遺跡	包合地	奈良・平安	67	寺 湯 漢 跡	包合地	縦文
22	筒 ケ 岐 漢 跡	包 合 地	縦文(?)	40	大 墓 漢 跡	集落	縦文・奈良・平安	68	清林 墓遺跡	塙	近世・近代
23	泉 谷 漢 跡	包 合 地	縦文・古墳・奈良・平安	40	坂ノ下道II遺跡	包合地	奈良・平安	70	桃生田遺跡	包合地	奈良・平安
24	瓦 原 工 漢 跡	包 合 地	奈良・平安	44	町 田 漢 跡	包合地	奈良・平安	71	雄 雄 一 墓 塙	塙	近世
25	下藤沢II遺跡	集落跡	塙・奈良・平安・近世	45	篆 荊 村 漢 跡	集落	縦文・奈良・平安				

第2図 桃生田前遺跡・下富前遺跡の位置と周辺の遺跡

## II . 調査経過

平成 6 年度に宮城県農政部農地計画課から瀬峰町富地地区県営ほ場整備事業の計画が持ち上がり、周知の遺跡である桃生田前遺跡、下富前遺跡が関わりを持つことが判明した。

このためほ場整備事業に先立ち、遺構・遺物の有無、遺跡の範囲、そして現水田面から遺構面までの深さなどを調べる確認調査を実施し、事業計画に反映させるとともに、その後行うこととなる事前調査の作業量を算出する基礎資料を得ることとなった。

確認調査は平成 8 年 4 月に実施された。桃生田前遺跡では 1 本、下富前遺跡では 23 本のトレンチを設定した。調査の結果、桃生田前遺跡では表土下約 30cm のところから竪穴住居跡、性格不明遺構が確認され、土師器が出土した。一方、下富前遺跡では低地部分からの遺構の検出はなかったが、微高地部分の各トレンチでは表土下約 20 ~ 40cm のところで地山が確認され、小竪穴遺構、溝状遺構、ピットなどの各遺構が確認された。また、遺物は縄文土器、土偶、石器、土師器、須恵器が出土した。この結果、下富前遺跡の範囲は微高地部分に遺構が広がることが想定され、時代は縄文時代・古代・中近世の複合遺跡であることが確認できた。

この成果を受けて宮城県教育委員会・築館土木事務所・瀬峰町教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、水路及び切り土工により削平される部分については事前調査、バイオライン敷設については立合調査を実施し、他の部分については盛土工で対応することとなった。

事前調査は平成 9 年 12 月に桃生田前遺跡から開始された。遺構確認作業によって竪穴住居跡 4 棟、溝状遺構 3 条、小竪穴遺構 7 基、井戸跡 1 基を検出し、溝状遺構及び住居跡などの遺構の掘り込みを行った段階で年末となり、天候等により一時調査を中断した。その後諸般の事情で発掘調査を再開できずにいたが、調査体制が整い調査が再開されたのは平成 11 年 4 月 12 日からであった。始めに下富前遺跡の調査を実施し、23 日までには遺構確認、精査、実測図、写真撮影などを終了することができた。また、22 日からは桃生田前遺跡の遺構の再確認作業を行うとともに、平成 9 年度調査の際廃土置き場となっていた東側部分について調査区を拡張し、掘立柱建物跡、井戸跡などを確認した。6 月 9 日までに遺構の各種実測図、写真撮影等の記録化を終了することができた。途中、5 月 22 日には地元の方を対象とした現地説明会を開催し、約 50 名の参加があった。



第3図 調査区の位置

### III. 桃生田前遺跡

#### 1. 検出された遺構と遺物

事前調査は、切土工により削平される部分について実施され、古代・中近世の遺構が検出された。遺構には竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡33棟、井戸跡5基、土塙12基、溝跡3条、ピットなどがある。これらのほとんどは耕作による削平のため、残存状況はよくない。遺構はすべて基本層序IV層で確認したが、南東から東で検出された遺構の埋土は旧表土と考えられる基本層序II層と類似しており、本来この層から掘り込まれたものと考えられる。遺構は、調査区中央から北側にかけての緩斜面に古代の竪穴住居跡や土塙などがまとまって分布しており、南側の標高の高い地点に掘立柱建物跡や井戸跡など中近世の遺構が集中している。東や北西付近は遺構が希薄である。各遺構および表土などから土師器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品などが出土している。

本調査区の基本層序は次のとおりである。

[ I 層 ] 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルトで、表土であり耕作土である。

[ II 層 ] 黒色 (10YR1.7/1) シルトで粘性はややあり、しまりは普通である。調査区東側に広く分布し、旧表土の可能性が高いと考えられる。耕作による削平により西側には残存していないかった。層厚は最大で30cm程である。古代の遺構及び東側の遺構の埋土はII層より掘り込まれたものと考えられる。

[ III 層 ] 黒褐色 (10YR3/2) シルトで粘性はないがしまっている。下部になるとIV層と類似する漸移層である。

[ IV 層 ] 明黄褐色 (2.5YR6/8) 粘土で粘性があり、固くしまっている。本遺跡での地山であり、中里火山灰と呼ばれるものである。



第4図 土層柱状図  
( N6 E 35付近, S = 1/25 )

#### 2. 竪穴住居跡と出土遺物

##### 1号住居跡

[位置] 調査区南西隅で確認された。

[重複] 住居跡は37・39・42・43・58号建物跡、5号溝跡、外延溝は12号井戸跡、6号溝跡と重複し、いずれよりも古い。

[規模・平面形] 東西5.85m、南北5.00m以上の方形である。

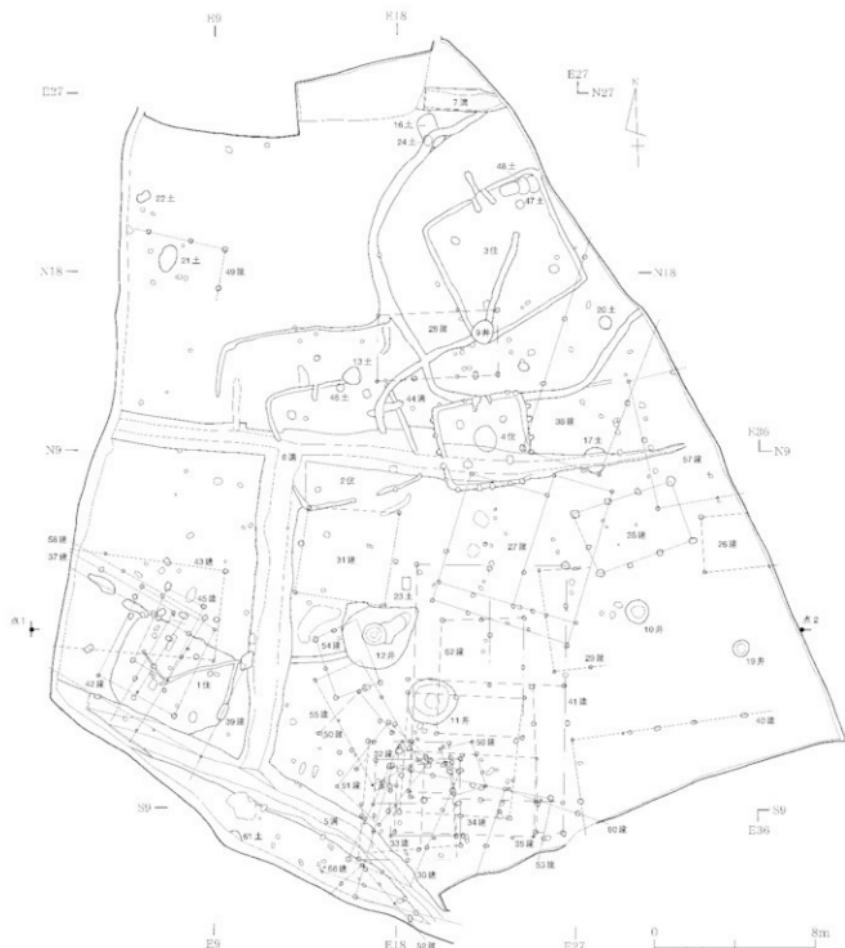
[方向] 東辺ではかるとN- 17° - Eである。

[壁] 北壁及び西壁の一部が残存している。最も残りのよい北西側付近では3cmで、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

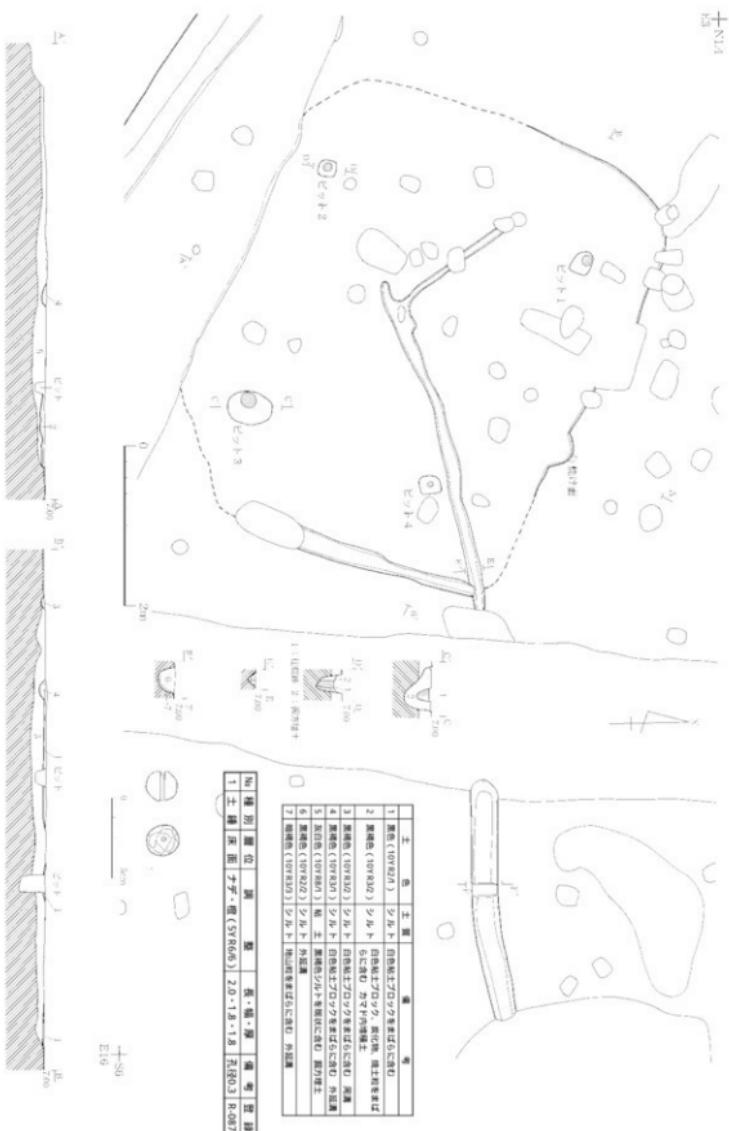
[堆積土] 黒褐色シルトである。住居跡中央から北側中央～西側中央付近にかけて薄く残存している。南側や北側中央から東では既に掘方埋土が露出している。

[床] 掘方埋土を床としているが、床面は中央部から北側西寄りにかけて残存するのみである。残存する床面はほぼ平坦である。掘方底面はほぼ平坦で、深さは5～17cmである。埋土は黒褐色シルト

III. 桃生田前遺跡



第5図 桃生田前遺跡遺構配置図



第6図 1号住居跡と出土遺物

を斑状に含む灰白色粘土である。

[柱穴] ピット1～4は主柱穴と考えられる。柱穴は円形～隅丸方形であり、規模は20～55cm、深さは30cmほどである。柱痕跡はすべてで確認し、径10～18cmである。

[カマド] 北壁中央やや東よりで竪穴外に半円形に20cmほど突き出した燃焼部が確認された。奥壁の一部が火熱により赤変している。住居跡北東側は削平によりカマド本体は検出されていないが、燃焼部最下層の堆積土が残存していた。煙道部は削平のため確認されてない。

[周溝] 東辺でのみ確認した。幅15～26cm、深さ6cmほどで、断面は「U」形である。堆積土は黒褐色シルトである。また、住居跡中央から北東隅にのびる溝が検出され、竪穴外にのび外延溝となる。竪穴北東隅で周溝と接続する。幅12～25cm、深さ5cmほどで、断面は「U」形である。底面レベルは周溝よりも若干低く、北東方向に傾斜する。堆積土は黒褐色シルトで周溝堆積土と類似しており、同時に機能していたと考えられる。

[外延溝] 住居跡北東隅から住居外北東方向にのびるものである。6号溝跡東側で280cmまで確認した。上幅30cm、深さ20cm、断面は「U」形である。堆積土は2層に細分され、黒褐色～暗褐色シルトで自然堆積とみられる。住居跡との接続部分は溝により破壊されており不明であるが、方向や堆積土が一致することから外延溝と考えられる。

[出土遺物] 床面、掘方埋土、堆積土より須恵器破片、土師器破片、土錘（第6図）が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整である。

## 2号住居跡

[位置] 調査区中央付近、西側で確認された。

[重複] 住居跡は4号住居跡外周溝、31号建物跡、13号土塙、44号溝跡よりも古く、46号土塙よりも新しい。外周溝は3号住居跡外周溝、28号建物跡、16号土塙よりも古く、24号土塙より新しい。

[規模・平面形] 東西6.40m、南北6.12m、ほぼ正方形である。

[方向] 東辺ではかるとN-18°～Wである。

[壁] 最も保存のよい東壁中央付近で3cmである。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

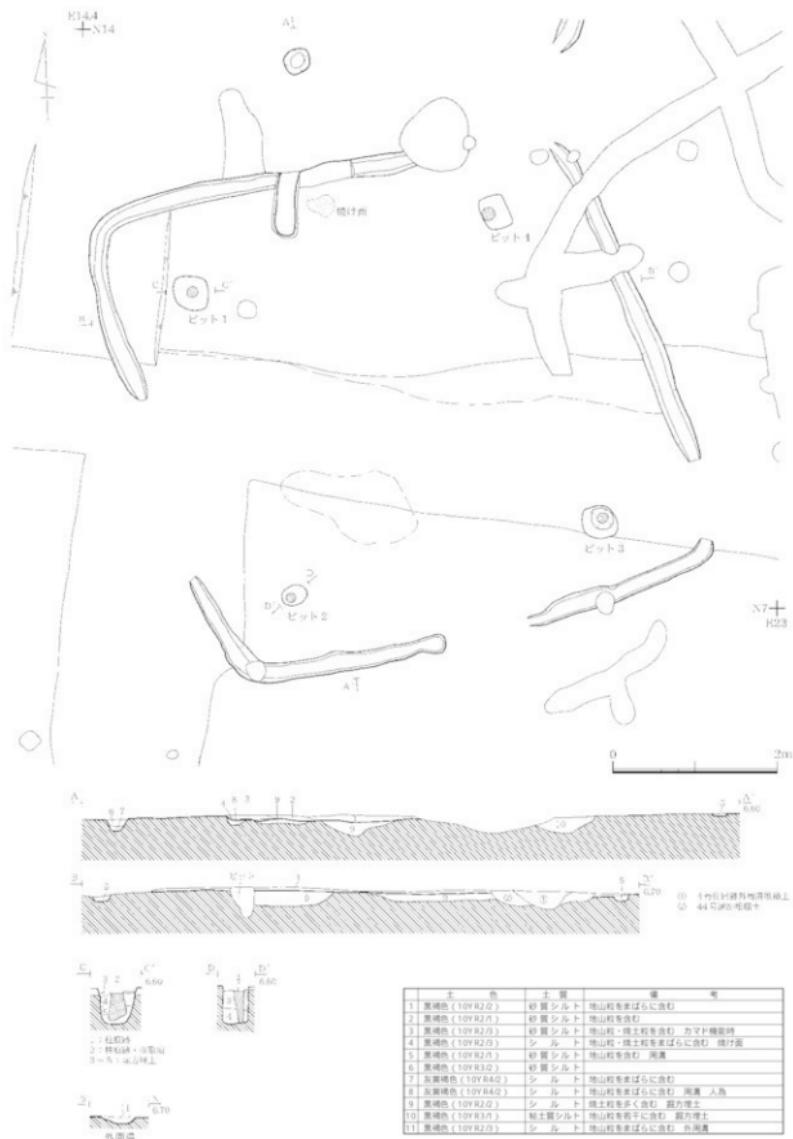
[堆積土] 地山土を含む黒褐色シルトである。

[床面] 掘方埋土を床としており、ほぼ平坦である。南側では堆積土が残存しておらず、地山や掘方埋土が露出していたため、本来の床面かどうかは不明である。掘方底面は凹凸があり、深さは4～23cmと一定していない。埋土は地山土を含む黒褐色シルトである。

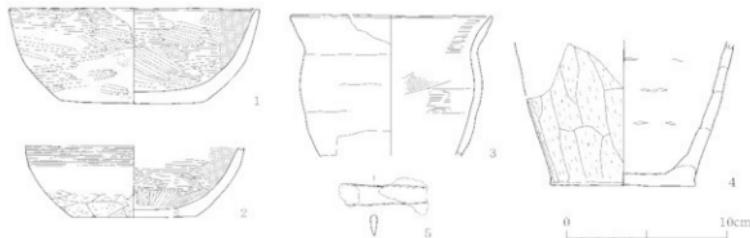
[柱穴] ピット1～4は柱穴と考えられる。柱穴は一辺45cmほどの隅丸方形で深さは52cmほどである。柱痕跡はすべてで確認され、径15cmの円形である。2ヶ所で抜取痕跡を確認している。

[カマド] 北壁中央から検出された。燃焼部側壁は地山土を用いて構築されている。左側壁が残存し、右側壁は調査時に誤って取り外した。底面レベルはほぼ水平である。燃焼部中央には26～30cmの不整円形の焼面が認められる。また、周溝部分は地山粒をまばらに含む灰黄褐色シルトによって人為的に埋め戻されている。煙道部は先端に径30cm、深さ16cmの煙出しピットが残存するのみである。

燃焼部奥壁との距離は140cmである。



第7図 2号住居跡



No	種別	層位	調査	整	器高・口径・底径	登錄
1	土師器	杯 床面	外：ヨコナデ・ケズリ・ミガキ、浅黄褐10YR8/0 底：マメツ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黒10YK2/1	5.9・15.2・9.4	R-001	
2	土師器	杯 堆積土	外：ヨコナデ・無調整・ヘラケズリ・明黄褐10YR6/6 底：ヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理	4.5・--・7.6	R-004	
3	土師器	壺 床面	外：マメツ・橙2.5YR6/6 内：ヨコナデ・ヘラナダ・浅黄2.5Y7/2	(8.7)・12.6・--	R-002	
4	土師器	壺 1 層	外：ヘラケズリ・灰黄2.5Y7/2 底：木葉痕+ナデ内：ナデ・浅黄褐10YR8/3	(8.8)・--・9.0	R-003	
5	刀子	刃部 1 層	平穂	長(5.4)・幅(1.2)・厚(0.4)	R-097	

第8図 2号住居出土遺物

[周溝]周溝はカマド部分が人為的に埋められているほかは全周している。上幅30cm、深さ15cmである。底面はほぼ平らで壁は垂直に立ち上がる。堆積土は地山土と焼土粒を含む黒褐色砂質シルトで、自然堆積とみられる。

[外延溝]竪穴部の外、北西付近に150cmほど確認されるが、削平のため住居跡との接続部分は不明である。また、外周溝とは住居跡北東隅から270cm程はなれた「フ」形から弧状に屈曲する地点で接続するとみられる。上幅30cm、深さ5cmであり、底面は平らでゆるやかに立ち上がる。堆積土は地山粒をまばらに含む黒褐色粘土質シルトである。

[外周溝]住居跡西辺から北辺を「フ」形に囲み、北方向に直角に向きを変え弧状に伸びるものである。底面はほぼ平らでゆるやかに立ち上がる。上幅15~30cm、深さ4~16cmである。底面レベルは南側の標高が高く、北側に向かいゆるやかに低くなる。堆積土は黒褐色シルトで、自然堆積とみられる。

[出土遺物]床面より土師器・須恵器破片・刀子などが出土している。

第8図1~4は土師器である。いずれも非ロクロ調整である。1~2は杯で平底で、いずれも内面黒色処理（以下、内黒とする）が施される。3は小型の壺であるが、外面は火熱による摩滅のため調整は不明である。4は長胴壺であり、体部外面は縦線のヘラケズリが施される。

### 3号住居跡

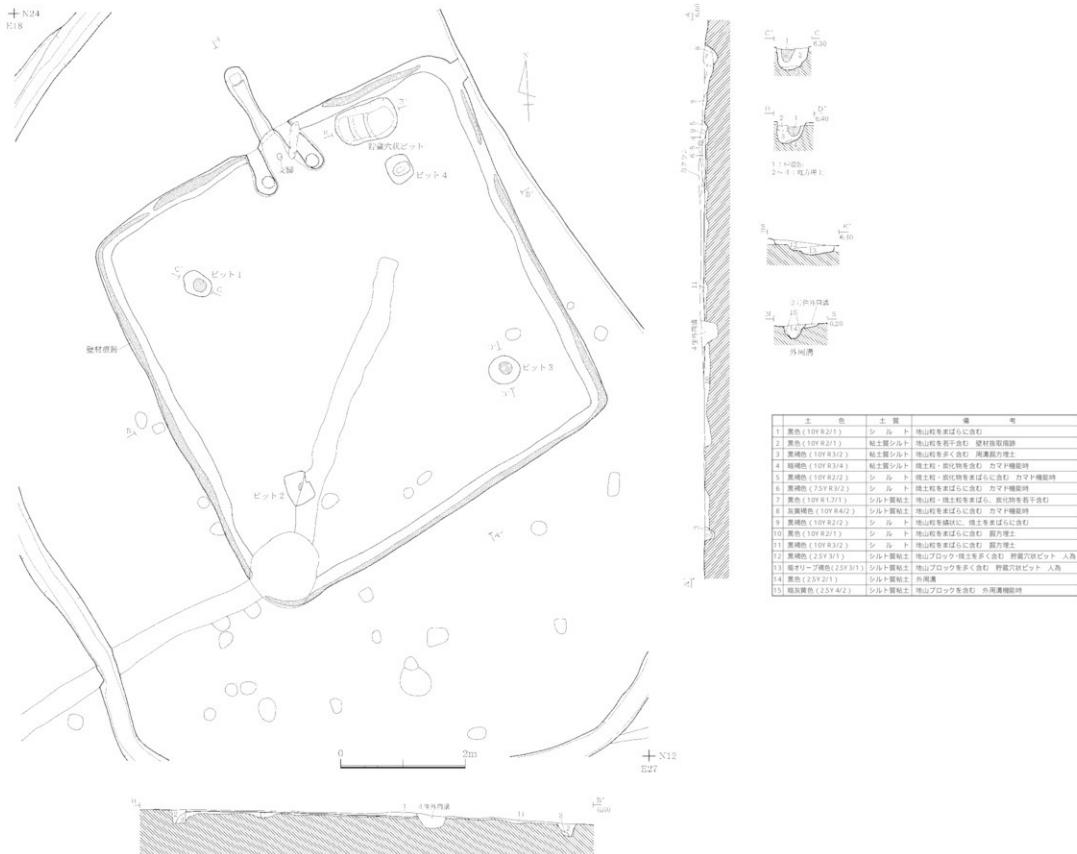
[位置]調査区北側に位置する。

[重複]住居跡は4号住居跡・外周溝、9号井戸跡より古く、47・48号土塙より新しい。外周溝は4号住居跡外周溝・16号土塙・7号溝跡より古く、2号住居跡外周溝・24号土塙より新しい。

[規模・平面形]東西6.50m、南北6.70mのほぼ正方形である。

[方向]西辺ではかるとN-24°-Wである。

[壁]床面よりほぼ垂直に立ち上がる。最も残りのよい西側中央部では2cmの高さで残存している。



第9図 3号住居跡平面図

[堆積土] 地山粒をまばらに含む黒色シルトである。

[床面] 掘方埋土を床としている。北東側を除いた他の部分では若干北東側に傾斜するがほぼ平坦である。掘方底面はやや凹凸があり、深さは4~10cmほどである。埋土は地山粒をまばらに含む黒褐色シルトである。

[柱穴] ピット1~4は主柱穴である。柱穴は規模40~50cmの隅丸方形~円形であり、深さは30~40cmである。柱痕跡は3ヶ所で確認しており、径15~20cmである。1ヶ所で抜取痕跡が認められた。

[カマド] 北壁ほぼ中央に付されている。燃焼部は奥行き120cm、幅55cmである。カマド側壁は黄褐色粘土により構築されており、焚口部付近には芯として倒立した土師器甕が用いられていた。燃焼部底面は煙道部に向かいゆるやかに傾斜する。火熱による赤変は側壁の一部に認められる。燃焼部ほぼ中央にはこぶし大の石があり、支脚として使用されたと考えられる。煙道部は長さ120cm、幅は30cm程で、底面レベルは先端に向かいゆるやかに低くなる。先端には規模32cm、深さ18cmの煙出しひilletがみられる。

[貯蔵穴状ピット] カマド右側で検出した。平面形は長軸110cm、短軸50cmの隅丸方形を呈し、深さは20cmである。底面は中央に向かいゆるやかに傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマド側にはテラス状の段が認められる。堆積土は2層に分層でき、焼土粒や地山ブロック、土師器、須恵器の破片を多く含む黒褐色シルト質粘土で人為堆積である。埋土上面にはカマド本体の崩壊土が分布していたことから、住居廃絶時には埋め戻されていたと考えられる。なお、崩壊土中から出土した土師器甕とカマド右側壁芯として転用された土師器甕は同一個体とみられる。

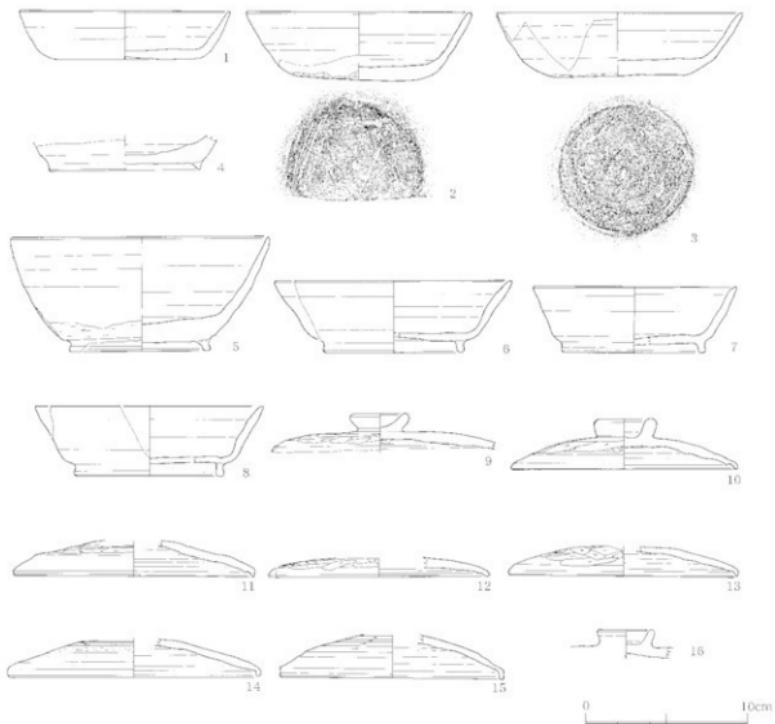
[周溝・壁材痕] カマド付近で途切れるほかは全周する。上幅は25~30cm、深さは16~18cmほどで、断面は箱形である。壁材は抜き取られていたが、下部で幅10~14cmほどの帯状の痕跡が認められるため、この痕跡は壁材痕を反映していると考えられる。

[外延溝] 北東隅から調査区外に伸びる。上幅35cm、深さ7cmである。底面は平らで壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は地山粒をまばらに含む黒褐色粘土質シルトである。

[外周溝] 3号住居跡を半円形状に囲み、調査区外に伸びる。上幅は60cm、深さ30cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南西側中央部分が最も高く、北と東に向かうにつれて低くなる。堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積と考えられる。上層より多くの遺物が出土している。

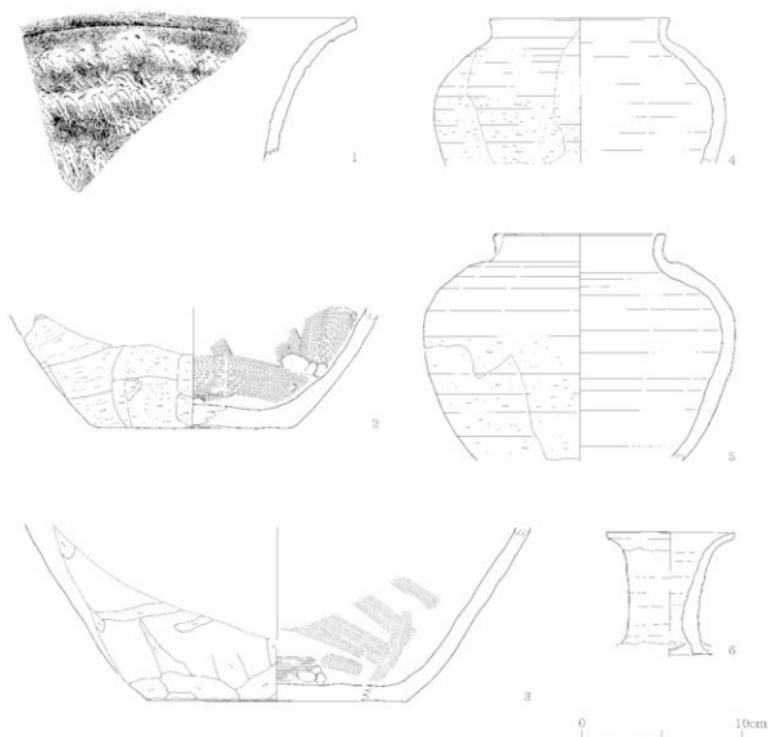
[出土遺物] 床面より須恵器、貯蔵穴ピット埋土、カマド右側付近のカマド崩壊土より須恵器、土師器、カマド構築土から土師器甕などが出土している。堆積土より土師器、須恵器、土製品、金属製品が出土している。

第12図1~8は土師器である。いずれも非口クロ調整である。1と2はカマド右側脇のカマド崩壊土より出土した。器形は半円状で内外面がミガキ調整であることから、金属器、特に銅椀を模倣したものと考えられる。調整痕跡が明瞭に残り、また、胎土も砂粒をほとんど含まない精良なもので、他の土器とは扱われ方が異なっていたと考えられる。外周溝出土の杯は有段丸底と平底のものがみられる。甕は長胴形で頸部に段を有するものと壺形がある。法量により、大中の2種がある。



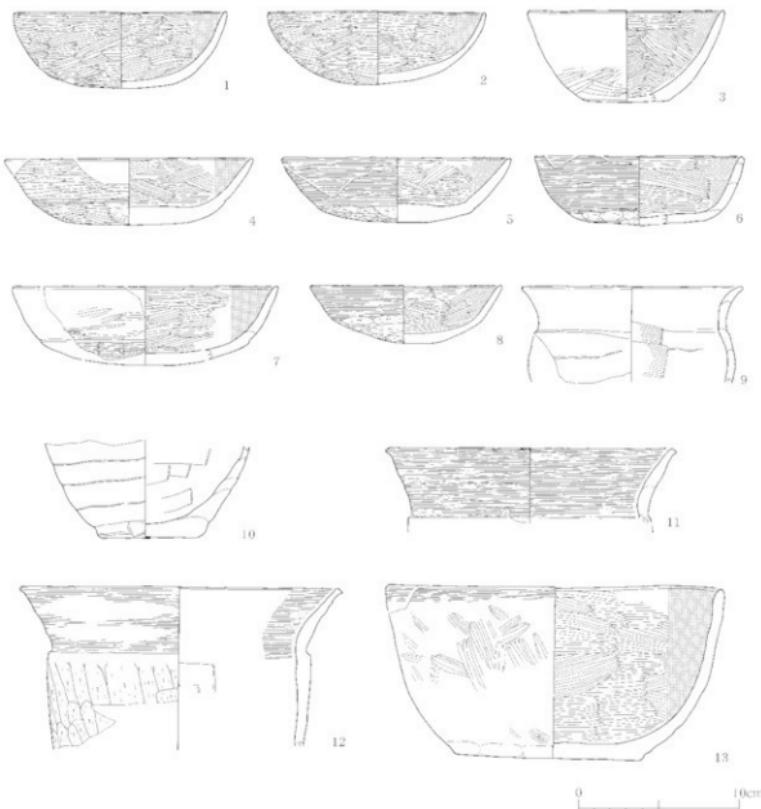
No.	種別	置位	調	型	器面・口径・底径	登錄
1	須惠器杯	床	外：ロクロナデ・灰10Y6/1 底：不明・手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ・灰10Y6/1		3.0・12.8・9.0	R-063
2	須惠器杯	外周溝堆	外：ロクロナデ・灰2.5Y7/0 底：不明・手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ・見込みナデ・にぶい廣幅10Y5/0		4.2・14.0・8.1	R-051
3	須惠器杯	外周溝堆	外：ロクロナデ・灰2.5Y6/2 番：回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ・内面見込みナデ・灰2.5Y6/2		3.0・15.0・8.0	R-049
4	須惠器杯斜鑿	床	外：ロクロナデ・灰10Y6/1 底：不明・回転ヘラケズリ 内：ロクロナデ・灰N7/1		(1.8)・~・9.0	R-062
5	須惠器高台竹秆	外周溝堆	外：ロクロナデ・回転ヘラケズリ・軽い手持ちヘラケズリ・8N4/1 底：静止無切り内：ナデ 内：ロクロナデ・灰N4/1		7.1・15.6・7.6	R-050
6	須惠器高台竹秆	外周溝堆	外：ロクロナデ・橙7.5Y8/6 底：静止無切り内：ロクロナデ・橙7.5Y8/6 軟質		4.5・14.6・8.0	R-046
7	須惠器高台竹秆	外周溝堆	外：ロクロナデ・にぶい橙7.5Y8/4 底：不明・ロクロナデ 内：ロクロナデ・にぶい橙7.5Y8/4 軟質		4.1・12.4・8.0	R-048
8	須惠器高台竹秆	外周溝堆	外：ロクロナデ・灰白10Y7/1底：不明 内：ロクロナデ・灰白10Y7/1		4.4・14.0・8.4	R-047
9	須惠器杯蓋	堆積土	外：ロクロナデ・軽い手持ちヘラケズリ・橙7.5Y8/7.6 つまみ：リング状 内：ロクロナデ・橙7.5Y8/7.6 軟質		(2.3)・~・~	R-067
10	須惠器杯蓋	外周溝堆	外：ロクロナデ・軽い手持ちヘラケズリ・灰白2.5Y8/8 つまみ：リング状 内：ロクロナデ・灰黄2.5Y7/2 やや軟質		3.1・13.8・~	R-039
11	須惠器杯蓋	カマド堆積土中	外：ロクロナデ・軽い手持ちヘラケズリ・灰白2.5Y8/2 内：ロクロナデ・灰白2.5Y8/2 軟質		(2.2)・14.6・~	R-065
12	須惠器杯蓋	外周溝堆	外：ロクロナデ・軽い手持ちヘラケズリ・灰黄7.5Y7/2 内：ロクロナデ・灰黄7.5Y7/2		(1.2)・13.6・~	R-040
13	須惠器杯蓋	壁材抜取面	外：ロクロナデ・軽い手持ちヘラケズリ・灰黄2.5Y7/2 内：ロクロナデ・灰黄2.5Y8/2 軟質		(1.9)・14.0・~	R-066
14	須惠器杯蓋	カマド堆積土中	外：ロクロナデ・回転ヘラケズリ・橙7.5Y8/7.6 内：ロクロナデ・橙7.5Y8/7.6 軟質		(2.4)・15.4・~	R-064
15	須惠器杯蓋	外周溝堆	外：ロクロナデ・回転ヘラケズリ・灰白7.5Y7/1 内：ロクロナデ・灰白7.5Y7/1		(2.7)・13.4・~	R-038
16	須惠器杯蓋	外周溝堆	つまみ：リング状・灰黄2.5Y5/5		(1.1)・~・~	R-037

第10図 3号住居跡出土遺物(1)



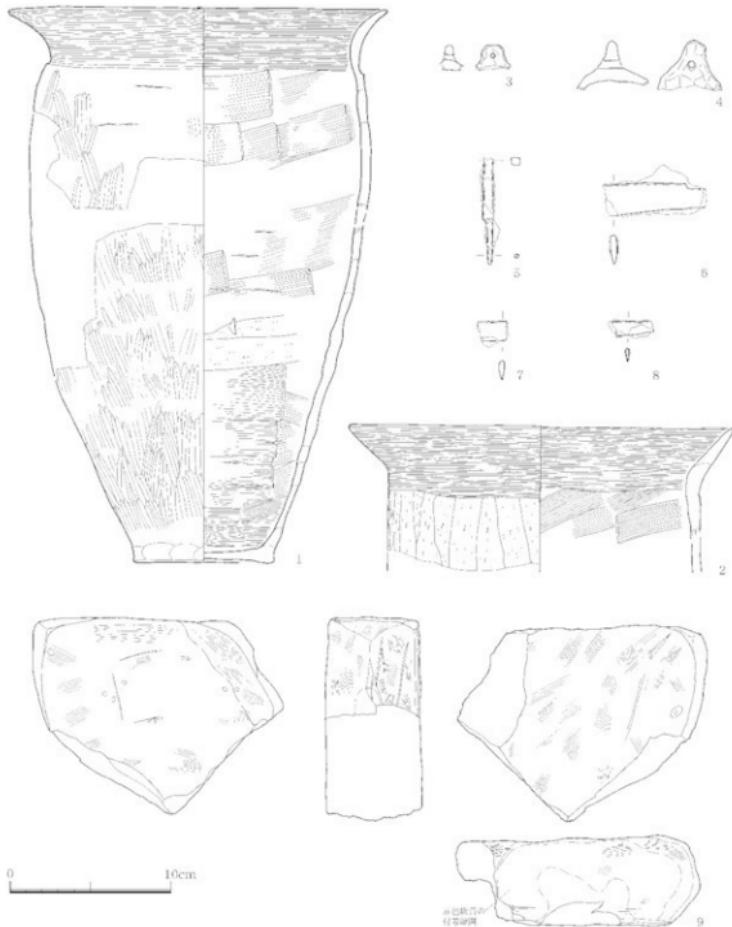
No.	種別	置位	調 整 整	器高・口径・底径	登録
1	須 悪 器 儀	外周溝 増	外：口クロナデ・褐斑波状文・灰10Y4/1 内：口クロナデ・灰10Y4/1	- - - - -	R-078
2	須 悪 器 儀	堆 積 土	外：ヘラケズリ・灰黄2.5Y7/2 底：ヘラナデ 内：ユビナデ・灰黄2.5Y7/2	(7.0) - - 14.4	R-071
3	須 悪 器 儀	外周溝 增	外：軽い手持ちヘラケズリ・ヨコナデ・ナデ 内：ユビナデ・灰7.5Y6/1	- - - - -	R-079
4	須 悪 器 塔錐 壶	外周溝 増	外：口クロナデ・回転ヘラケズリ・黄8R2.5Y5/1 内：口クロナデ・暗黄灰2.5Y5/2	(9.1) - 10.0 - -	R-042
5	須 悪 器 塔錐 壶	外周溝 増	外：口クロナデ・回転ヘラケズリ・褐5YR7/6 内：口クロナデ・褐5YR7/6 軟質	(14.1) - 9.6 - -	R-072
6	須 悪 器 長錐 壺	外周溝 増	外：口クロナデ・褐灰SYR4/1 内：口クロナデ・褐灰SYR4/1	(6.9) - 8.0 - -	R-043

第11図 3号住居跡出土遺物(2)



No	種別	層位	調	整	基面・口径・底径	登録
1	土師器	カマド堆積土中	外：ミガキ、浅黄褐色10YR8/3 底：ミガキ 内：ミガキ・黒色処理 黒10YR1.7/1	胎土精良	4.7・13.0・5.8	R-006
2	土師器	カマド堆積土中	外：ミガキ・浅黄褐色10YR8/3 底：ミガキ 内：ミガキ・黒色処理 黒10YR1.7/1	胎土精良	4.4・13.2・-	R-005
3	土師器	カマド堆積土中	外：マメツ・ヘラミガキ・浅黄褐色10YR8/3 底：マメツ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黒10YR2/1		5.6・12.0・5.6	R-096
4	土師器	外周溝埋	外：ヘラミガキ・浅黄褐色10YR8/0 底：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黒7.5Y2/1		4.0・15.2・7.0	R-016
5	土師器	外周溝埋	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・橙2.5YR6/6 底：ヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黑2.5Y2/1		4.0・13.8・9.5	R-014
6	土師器	外周溝埋	外：ヨコナデ・明黄褐色10YR7/6 底：ヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黑10YR2/1		4.3・12.6・8.6	R-015
7	土師器	外周溝埋	外：ヘラミガキ・浅黄褐色10YR8/3 底：ヘラケズリ・ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黑2.5Y2/1		4.5・16.2・-	R-013
8	土師器	外周溝埋	外：ヨコナデ・浅黄2.5Y7/0 底：ヘラケズリ 内：ヘラミガキ・黒色処理 オリーブ黒7.5Y3/1		3.5・11.8・3.6	R-017
9	土師器	外周溝埋	外：マメツ・橙2.5Y6/6 内：ヨコナデ・ヘラナデ・暗灰褐7.5YR5/1		(5.9)・13.6・-	R-022
10	土師器	外周溝埋	外：軽けナデ・卷上腹・端灰10YR6/0 底：木葉痕・アゲデ 内：ヘラナデ・浅黄褐色7.5YR8/3		(6.0)・-	6.0 R-020
11	土師器	外周溝埋	外：ヨコナデ・浅黄褐色10YR8/0 内：ヨコナデ・暗灰褐2.5Y5/2		(4.6)・17.6・-	R-023
12	土師器	カマド堆積土中	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・灰黄褐色10YR5/0 内：ヨコナデ・灰黄褐色10YR8/3		(10.1)・19.2・-	R-007
13	土師器	外周溝埋	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ・浅黄2.5Y7/0 底：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・黒色処理 黑2.5Y2/1		10.9・20.6・10.7	R-026

第12図 3号住居跡出土物(3)



No	種別	層位	調	整	器高・口径・直径	登錄	
1	土師器 横	カマド右側壁	外:ヨコナデ・ケズリ・ミガキ・内:灰漬け10YR7/9	内:マヌカ・ヨコナデ・ナデ・ケズリ・灰漬け10YR6/2	(37.6) · 23.0 · 8.5	R-027-28	
2	土師器 横	カマド左側壁	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ・ヘラナデ		(9.0) · 23.6 · -	R-029	
3	鉢	外周溝堆	外:ナデ・孔・灰7.5YS5 内:ナデ・灰7.5YS5	須恵器質	(1.2) · - · -	R-089	
4	土	鉢	壁材抜取物	内:ナデ・孔・橙SYR6/6 内:ナデ・孔・黄褐10YR7/3	土師器質	(3.3) · - · -	R-088
5	鉄	頭	断面四角		長(6.6) · 幅0.7 · 厚0.3	R-092	
6	刀	子	外周溝堆	刃部・中茎・平様・片闊	長(6.3) · 幅1.9 · 厚0.5	R-090	
7	刀	子	カマド掘出し	刃部・平様	長(2.1) · 幅1.2 · 厚0.4	R-093	
8	刀	子	外周溝堆	刃部	長: (2.8) · 幅: 0.9 · 厚0.3	R-091	
9	鉢	石	外周溝堆	直4面研磨・2面に赤色物質付着・砂岩	長: (14.4) · 幅: (12.2) · 厚: 5.6 · 重: 1.750	R-082	

第13図 3号住居跡出土遺物(4)

第13図1は体部外面にヘラケズリの後全体にヘラミガキが施される。第12図12、第13図2は体部外面にヘラケズリが施される。口縁部は第13図1、2が玉縁状、第12図11、12が平坦で沈線状にくぼむ。

第10、11図は須恵器である。灰色を呈し硬質のものと橙色を呈し焼成不良の軟質のものがある。第10図1～3は杯である。底部は手持ちヘラケズリによる再調整が施されるため、切り離しは不明である。また、内面見込みはナデ調整がみられる。杯蓋は天井部が回転ヘラケズリのもの（第10図14、15）と軽い手持ちヘラケズリのものがある（第10図9～12）。後者にはリング状つまみがつく。櫛の頸部には2条単位の櫛描波状文が3段にわたりめぐる。

土鈴はいずれもつまみ部分が残存するもので、土師質のものと須恵質のものがある。

#### 4号住居跡

[位置] 調査区中央東寄りで検出された。

[重複] 住居跡は3号住居外周溝より新しく、6号溝跡、26・38号建物跡より古い。外周溝は2号住居跡、3号住居跡及び外周溝、44号溝跡より新しく、9号井戸跡より古い。

[規模・平面形] 東西4.60m、南北4.50mの正方形である。

[方向] 西辺ではかるとN-18°-Wである。

[堆積土] 地山土・炭化物・焼土粒をまばらに含む黒褐色砂質シルトである。

[壁] 最も残りのよい北西部では高さ11cmほど残存している。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。

[床面] 掘方埋土を床としている。床面レベルは西側が高く、東側にむかい低くなる。掘方底面はほぼ平坦で、深さは10～12cmほどである。埋土は地山粒をまばらに含む黒色シルトである。

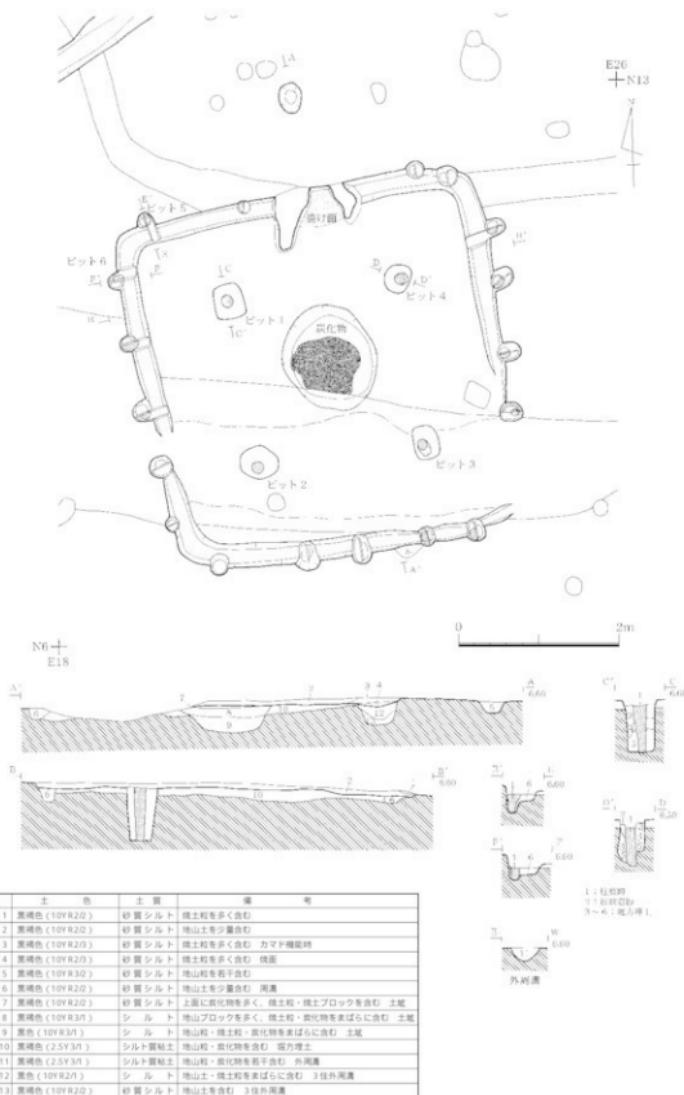
住居跡ほぼ中央から土塙が検出された。長径130cm、短軸117cm、深さ40cmの略円形を呈する。底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。上面には炭化物のまとまりが認められた。堆積土は3層に分層され、地山土、炭化物、焼土を含む黒～黒褐色シルトで人為堆積とみられる。埋土からは鉄滓が若干出土している。また、住居跡床面や堆積土中より炉壁片とみられるスサ入りの粘土塊（図版7-7）が出土している。なお、埋土の水洗を実施したが鍛造剥片はみられなかった。

[柱穴] ピット1～4は主柱穴と考えられる。柱穴は隅丸方形で規模は40～50cm、深さ60cmほどである。柱痕跡は4ヶ所で確認され、いずれも径14cmである。2ヶ所で抜取痕を確認している。

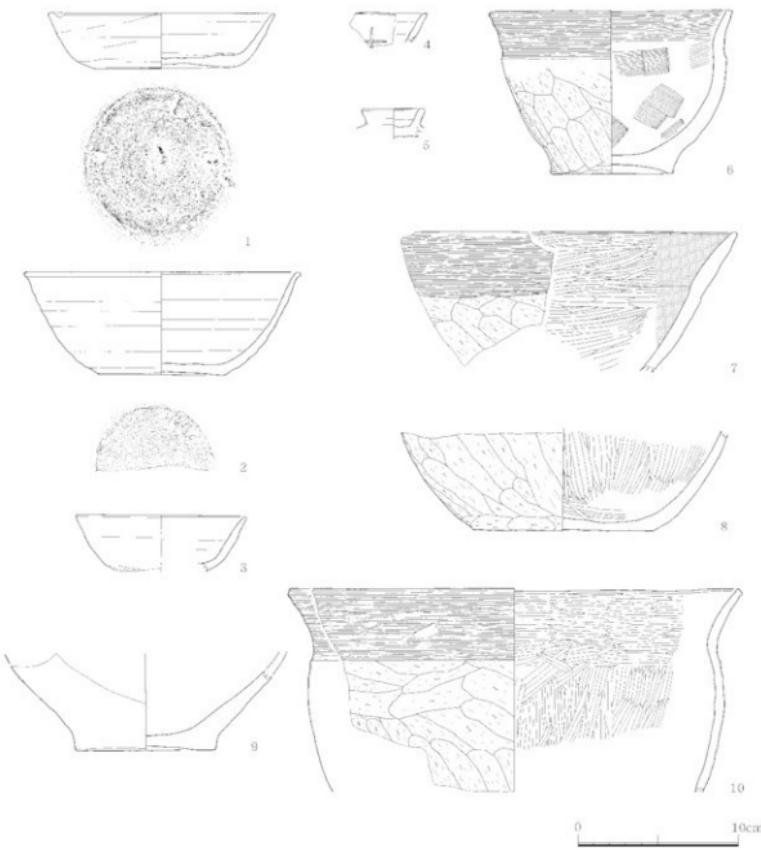
[カマド] 北壁ほぼ中央に付されている。燃焼部は奥行き58cm、幅49cmであり、側壁は黄褐色粘土を用いて構築されている。底面レベルは奥壁に向かうにつれゆるやかに低くなる。燃焼部には40～50cmの焼面がみられた。煙道部は先端に規模28～38cm、深さ10cmの煙出しピットが残存するのみである。燃焼部奥壁との距離は128cmである。

[周溝・壁柱穴] カマド部分を除き全周する。上幅30cm、深さ20cmである。断面は箱形である。堆積土は地山土を含む黒色砂質シルトである。周溝からは17個の柱穴が確認された。これらは壁柱穴と考えられる。北辺以外の3辺には50～60cm前後の間隔で5個づつの柱穴がみられる。柱穴のほとんどは壁を掘り込んで作られている。規模は径18～36cm、深さ10～30cmほどの円形で、柱痕跡は径12～16cmである。

[外周溝] 4号住居跡の北及び西側の2方を囲み、北東方向に伸びる。上幅は42cm、深さは27cmで、

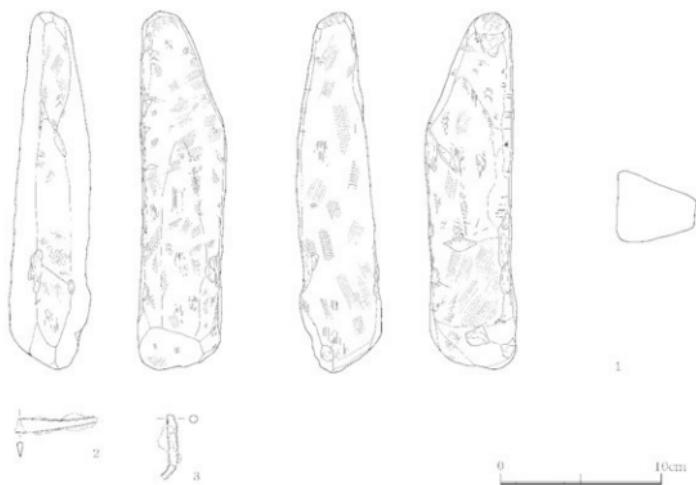


第14図 4号住居跡



No.	種類	部位	調	型	器名	口径	底径	高さ	図版
1	須恵器	杯	カマド右床	外：ロクロナデ・灰白2.5YR8/1・火ダスキー・巻上痕 底：回転ヘラ切り・斜いナデ	内：ロクロナデ・灰白2.5YR8/1	3.4 - 13.8	8.2	R-070	
2	須恵器	杯	堆積土	外：ロクロナデ・灰白2.5YR7/0 底：回転糸切り	内：ロクロナデ・灰白2.5YR7/0	6.4 - 17.0	7.8	R-069	
3	須恵器	杯	外周溝埋	外：ロクロナデ・下部ヘラケズリ・灰白5YR8/0 内：ロクロナデ・灰白5YR8/1	(3.5) - 10.4	-	-	R-059	
4	須恵器	杯	堆積土	外：ロクロナデ・ヘラ記号「+」 内：ロクロナデ・黄灰2.5Y5/0	内：ロクロナデ・黄灰2.5Y5/0	-	-	-	R-098
5	須恵器	蓋	外周溝埋	つまみ：リング状・灰白2.5YR8/0		(1.8)	-	-	R-060
6	土師器	瓶	カマド右床	外：ヨコナデ・無調査・ヘラケズリ・黒褐色10YR3/2 底：ナデ	内：ヨコナデ・ヘラナデ・にぶい黄褐色10YR7/2	10.0 - 14.2	7.0	R-010	
7	土師器	鉢	堆積土	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・にぶい黄褐色10YR7/4 底：ヘラケズリ	内：ヘラミガキ・黒色絞理・黒N1.5/	-	-	-	R-025
8	土師器	鉢	カマド右床	外：ヘラケズリ・浅黃褐色10YR8/4 底：ヘラケズリ	内：ヘラミガキ・黄及2.5Y6/1	(6.0)	-	11.2	R-008
9	土師器	瓶	外周溝埋	外：マメツ・浅黃褐色10YR8/3 底：木葉痕・ナデ	内：マメツ・浅黃褐色10YR8/3	(6.0)	-	8.6	R-011
10	土師器	瓶	堆積土	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・灰白10YR8/2 内：ヨコナデ・オーリープ黒5Y3/0		(12.2)	-	27.6	R-009

第15図 4号住居跡出土物(1)



No	種別	層位	特徴	長・幅・厚・重	登錄
1	鉢	石床面	4面研磨・砂石	22.1・5.2・4.4・717	R-083
2	刀子柄部	床面	平横	(5.0)・0.9・0.4・-	R-095
3	鉄頭	外周溝1層	断面丸形	(4.0)・0.5・0.5・-	R-094

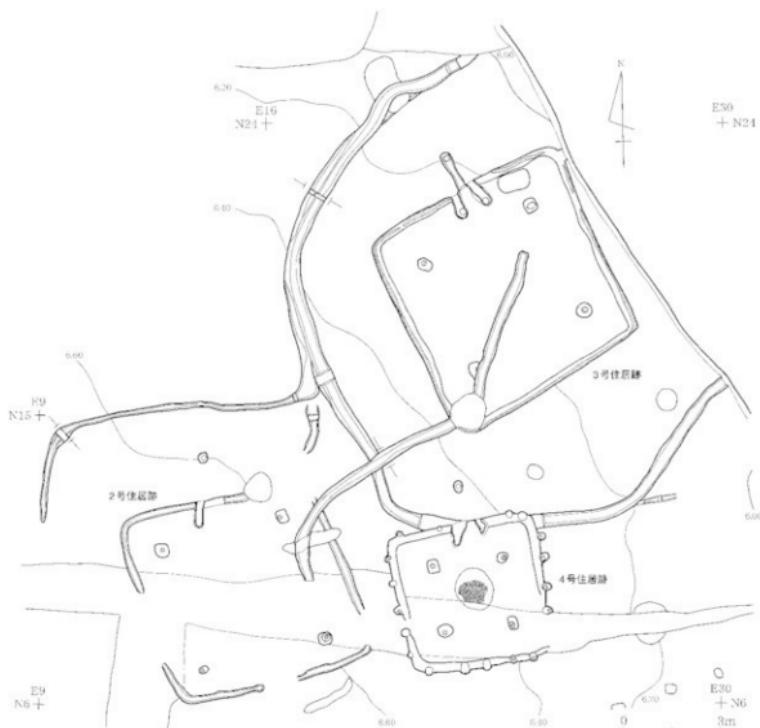
第16図 4号住居跡出土遺物(2)

断面は「U」形である。底面レベルは南側部分が最も高く、北東に向かうにつれてしだいに低くなる。堆積土は黒褐色シルト質粘土～砂質シルトであり、自然堆積とみられる。

[出土遺物] カマド右床面直上、床面から須恵器、土師器、刀子、砥石などが出土している。

第15図6～10は土師器である。いずれも非口クロ調整である。6は小型の甕で口縁端部は平坦で沈線状にくぼむ。頸部付近の無調整部分より下はヘラケズリが施される。10は長胴甕であり、口縁端部は平坦で沈線状にくぼむ。体部外面は上部付近が横位、中部が縦位のヘラケズリが施される。内面は口縁部付近が横位、体部が縦位のヘラミガキが施される。

1～4は須恵器杯である。1の底部切り離しは回転ヘラ切りのち軽いナデの再調整がある。内面立ち上がり部分には沈線状の調整がみられる(図版7-2b)。2は底部切り離しは回転系切りで再調整はみられない。4は口縁部破片である。「+」のヘラ記号がみられる。



第17図 2・3・4号住居跡遺構配置図

### 3. 掘立柱建物跡と出土遺物

掘立柱建物跡は33棟確認された。古代と考えられる25号建物跡と中近世と考えられる建物跡32棟である。中近世の建物跡は方向により3類に分類できる。A類はほぼ真北方向のものである。B類は北で東に傾くもので、3類に分類出来る。B I類は北で東に18°ほど、B II類は北で東に30°ほど、B III類は北で東に45°ほど傾く。C類は北で西に傾くもので、2類に分類出来る。C I類は北で西に10°ほど、C II類は北で西に25°ほど傾く。各類の重複関係はB I類→A類→B II類の新旧関係が認められ、また、各類内でも同時に存在し得ないものがみられる。調査区南側では6号溝跡を境に東側で多くの建物跡が重複しており、A類のものが多い。6号溝跡西側の調査区南西隅付近ではB II類のものが多い。また、C I類は調査区東側で多く見られる。ほとんどの柱穴は20~30cmほどのものである。いずれの柱穴も埋土は黒色土を主体とし、地山土をまばら多く含む。ここでは主要な建物跡の概要を報告するにとどめ、他の建物については属性表で提示することとする。



第18図 建物跡・井戸跡・土塁平面図(1)



第19図 建物跡・井戸跡・土塙平面図(2)

### 25号建物跡

調査区東側に位置する。桁行3間、梁行2間の東西棟である。桁行は北側柱列で5.14m（西より1.84m+1.54m+1.76m）、梁行は西側柱列3.32m（北より1.86m+1.96m）である。東側柱列北より2個目の柱穴は検出されなかった。方向は西側柱列ではかるとN-20°-Wである。柱穴は9ヶ所確認された。柱穴は円形～隅丸方形で、規模は26～48cmほどの大さで深さは20cmである。隅柱は他と比べ規模が大きい。埋土は地山粒を多く含む黒褐色～灰褐色シルトである。柱痕跡はすべてで確認され、径20cmである。柱穴埋土より土師器、須恵器破片が出土している。

### 27号建物跡

調査区中央に位置する。4号住居跡・41号建物跡より新しく、6号溝跡より古い。桁行4間、梁行3間の東西棟で南側には1間分の廊がつくものである。西妻北から2番目、東妻北から3番目の柱穴は検出されなかった。北東隅は1間分張り出している。また、建物内部には間仕切りの柱穴が1ヶ所確認される。平面規模は身舎で桁行は南側柱列7.10m（西より1.90m+2.10m+1.00m+2.10m）、梁行は西側柱列で6.70m（北より1.50m+5.22m）である。廊の出は0.9mである。方向は西側柱列にはかるとN-18°-Eである。柱穴は17ヶ所確認された。柱穴は規模30～25cmの円～隅丸方形であり、埋土は地山粒をまばらに含むオリーブ黒～黒褐色シルトである。柱痕跡は12ヶ所確認され、径10cmである。柱穴埋土より土師器破片が出土している。

### 30号建物跡

調査区南側に位置する。5号溝跡より古い。桁行3間、梁行1間の南北棟である。桁行は西側柱列で6.16m（北より1.95m+2.00m+2.16m）、梁行は北側柱列で3.20m（北より1.35m+1.80m）である。方向は西側柱列ではかるとN-25°-Eである。柱穴は7ヶ所確認された。柱穴は円形～隅丸方形で規模20～30cmほどで、深さは7～19cmである。埋土は地山粒をまばらに含む黒～黒褐色シルトである。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径8～14cmほどである。遺物は出土していない。

### 34号建物跡

調査区南側に位置する。11号井戸跡と重複する。桁行3間、梁行2間の南北棟である。桁行は西側柱列で6.00m（北より2.50m+1.63m+1.84m）、梁行は南側柱列5.38m（西より3.00m+2.38m）である。方向は西側柱列ではかるとN-5°-Eである。柱穴は10ヶ所確認された。柱穴は隅丸方形～円形を呈し、規模16～32cm、深さ9～25cmである。埋土は地山粒をまばら～多く混入する黒褐色シルト～粘土質シルトである。また、2ヶ所で炭化物を確認した。柱痕跡は6ヶ所で確認され、径9～15cmである。柱穴埋土より土師器體部破片が出土している。

### 39号建物跡

調査区南西隅に位置する。1号住居跡より新しく、5号溝跡より古い。桁行3間以上、梁行2間以上の東西棟で調査区外の南側、西側へ伸びる。桁行は北側柱列で8.30m（西から2.20m+6.10m）以上、梁行は東側柱列で5.10m（北より2.70m+2.40m）である。東側柱列北から2個目の柱穴から東西方向に間仕切りの柱穴が認められる。方向は西側柱列ではかるとN-29°-Eである。柱穴は5ヶ所確認された。柱穴は長楕円形で、規模86～158cm、深さ65cmである。埋土は地山粒を斑状に含

む黒褐色シルトである。柱痕跡は5ヶ所で確認され、径14~20cmである。1ヶ所で抜き取り痕跡を確認した。遺物は出土していない。

#### 40号建物跡

調査区南東隅に位置する。桁行4間以上、梁行1間以上の南北棟で、調査区外の南側へ伸びる。東側では柱穴は確認することはできなかった。桁行は北側柱列で8.60m+a（西から2.57m+0.30m+1.40m+1.78m+2.64m+a）、梁行は西側柱列で3.1m+aである。方向は西側柱列ではかるとN-7°-Wである。柱穴は7ヶ所確認された。柱穴は円-隅丸方形であり、規模16~34cm、深さ23cmである。埋土は地山粒を多く含む黒~黒褐色シルトである。柱痕跡は5ヶ所で確認され、径12~14cmである。遺物は出土していない。

#### 41号建物跡

調査区中央~南に位置する。27・60号建物跡より古い。桁行4間、梁行3間の南北棟で南側に1間分の扉がつく。平面規模は身舎で桁行は東側柱列11.12m（北より1.80m+2.52m+2.00m+4.00m）、梁行は南側柱列で7.64m（西より8.90m+2.45m）である。建物内には間仕切りの柱穴が5ヶ所確認される。方向は西側柱列ではかるとN-3°-Eである。南側には張り出しが1間分確認される。張り出しの出は1.55mである。柱穴は16ヶ所確認された。柱穴は隅丸方形で径20~30cm、深さ30cmほどである。埋土は黒~黒褐色シルト~粘土質シルトで地山粒をまばら~多く混入する。柱痕跡は14ヶ所で確認され、径10~12cmである。1ヶ所で抜き取り痕跡が見られる。遺物は出土していない。

#### 53号建物跡

調査区南東隅に位置する。33号建物跡・5号溝跡より古い。桁行4間、梁行4間の東西棟で、東側柱列1個目から南側のものと南側柱列1個目から東側のものは調査区外となるため未検出である。桁行は北側柱列で8.10m（西より2.10m+2.10m+1.90m+2.20m）である。梁行は西側柱列で6.75m（西より1.10m+2.20m+1.90m+1.50m）である。方向は西側柱列ではかるとN-16°-Eである。柱穴は11ヶ所確認された。柱穴は隅丸方形~円形で規模は25~35cm、深さ6~37cmで、埋土は地山土を多く~まばらに含む黒褐色~オリーブ黒色粘土質シルトである。柱痕跡は6ヶ所で確認され、径8~16cmである。1ヶ所で抜き取り痕跡が確認された。遺物は出土していない。

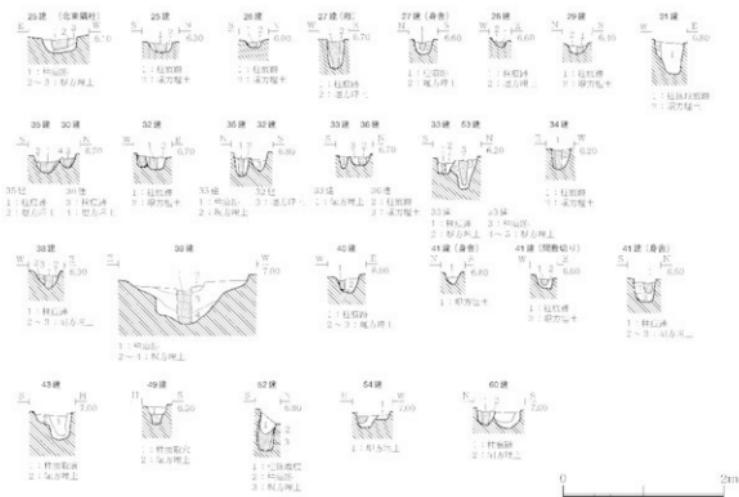
### 4. 井戸跡と出土遺物

#### 9号井戸跡

調査区北東に位置する。3号住居跡、4号住居跡外周溝より新しい。不整円形で長軸1.19m、短軸0.92m、深さ0.52mの素掘りの井戸である。底面は中央に向かいゆるやかに傾斜し、壁はゆるやかに立ち上がる摺鉢状である。堆積土は2層に大別され、1層は自然堆積、2・3層は人為堆積とみられる。遺物は土師器の破片が出土している。

#### 10号井戸跡

調査区南東側に位置する。平面形は円形で長軸1.25m、短軸1.15m、深さ1.00mの素掘りの井戸である。底面は平らで直線的に立ち上がる円筒形である。堆積土は5層に細分され、1・2層には灰白



第20図 建物跡柱穴断面図

色火山灰ブロックが含まれる。いずれも自然堆積とみられる。遺物は土師器の細片が出土している。

#### 11号井戸跡

調査区南側に位置する。34号建物跡と重複する。平面形は円形で長軸2.40m、短軸2.35m、深さ2.92mの素掘りの井戸である。底面は平坦で、断面は円筒形である。堆積土は1~8層まで細分し、自然堆積とみられる。9層以下は断面図を作成できなかったが、下層の堆積土はグラウンドした地山ブロックを含む褐色シルトである。遺物は上層より土師器、須恵器の細片、8層以下より曲物残片、不明木製品、材などが出土している。

不明木製品（第24図4）は長さ38.0cm、幅8.8cmの長方形を呈した台に2つの脚がつく。脚の断面形はほぼ正方形である。台と脚は一木から作られている。用途は不明である。

#### 12号井戸跡

調査区南側に位置する。31・54・55号建物跡と重複する。平面形は不整円形で北東隅が張り出す。長軸3.12m、短軸2.84m、深さ2.87mの素掘りの井戸である。底面は中央に向かい窪み、壁は底面から約1.9mまでは直線的に立ち上がり、円筒形を呈する。そこから傾斜が変換し外に開く漏斗状を呈する。円筒部分は長径1.25m、短径1.15mである。北東隅より階段状の施設が4段確認される。2~4段までは段の縁に割材をおき、材の両端を止木となる杭を打ち込んで固定している。1段目の段は長軸60cm、短軸33cm、検出面とのレベル差は45cm、2段目は長軸60cm、短軸25cm、1段目とのレベル差は20cm、3段目は長軸50cm、短軸20cm、2段目とのレベル差は13cm、4段目は長軸65cm、短軸18cm、3段目とのレベル差は8cmである。堆積土は大別2層で1~4層は黒褐色粘土質シルト

を主体とし、自然堆積とみられる。5・6層は砂粒・灰褐色砂ブロックを含む黒褐色粘土で機能時の堆積とみられる。6層以下は記録を作成できなかったが、5層と同質の堆積土である。遺物は上層より土師器、須恵器、中世陶器の破片や鉄滓、碗型滓、木製品、下層より柄杓が出土している。第23図14は中世陶器搗鉢である。口縁部形態は端部が内外面ともに外に張り出し、体部外面には指圧痕が顕著にみられる。口縁端部が内外面ともに外に張り出す器形の搗鉢は15世紀代の常滑窯跡製品にみられるが、多賀城市新田遺跡などでは同器形で外面に指圧痕がみられ、内面に節目をもつものが出土しており、在地窯跡の製品の可能性があるという<sup>11</sup>。15は産地不明の甕体部である。第24図3は柄杓である。径10.2～12.0cm、高さ10.9cmの小型のもので、土圧によりややつぶれている。内面には0.3～0.6mmの間隔で縦ケビキが入れてあり、このため外面にはゆるい稜が形成されている。側板には正面に1.5～2.0cmの円形、背面に0.6～1.0cmの楕円形の孔がみられ、柄が取り付いたものとみられる。

#### 19号井戸跡

調査区南東側に位置する。平面形は円形で長軸90cm、短軸80cm、深さ50cmの素掘りの井戸である。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる円筒形である。堆積土は5層に分けられ、自然堆積とみられる。遺物は出土しなかった。

### 5. 土塙と出土遺物

土塙は12基検出された。ここでは重複や遺物の出土があったものについて報告する。

#### 13号土塙

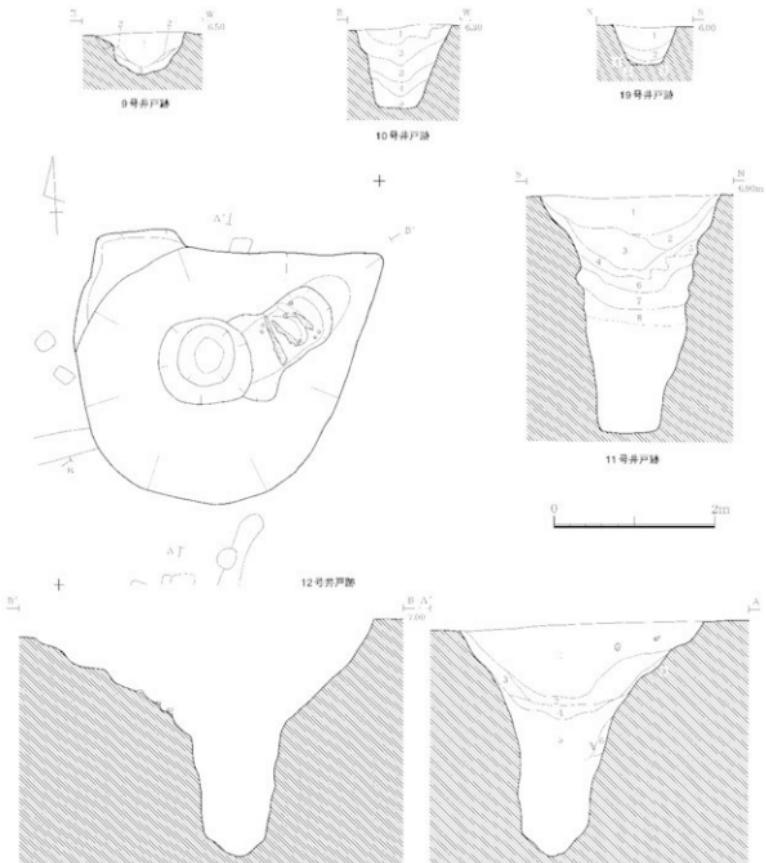
調査区中央に位置する。2号住居跡より新しい。平面形は隅丸方形で長軸80cm、短軸60cm、深さ22cmである。断面は皿状でゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分され、自然堆積とみられる。遺物は2層上面からほぼ完形で朱彩された南小泉式期土師器杯（第23図4）が出土している。

#### 16号土塙

調査区北側に位置する。2号住居跡外周溝、24号土塙より新しく、3号住居跡外周溝より古い。平面形は隅丸長方形で長軸140cm、短軸100cm、深さ15cmである。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。壁は基本層序IV層および2・3号住居跡外周溝、24号土塙堆積土からなり、底面は基本層序IV層及び24号土塙堆積土からなる。堆積土は3層に分層され、1層は黒褐色シルトで下部に炭化物を多く含むものである。また、椾出面や堆積土に土師器、須恵器破片を含む。2層は地山ブロックを多く含む灰褐色シルトで人為堆積とみられる。第23図3は底面よりやや浮いた状態で出土した須恵器杯蓋である。

#### 22号土塙

調査区北西隅に位置する。平面形は不正隅丸方形で長軸70cm、短軸34～45cm、深さ4cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は1層であり、地山粒・炭化物をまばらに含む黒褐色シルトである。出土遺物には椾出面上面、底面よりやや浮いた状態でロクロ土師器杯、長胴甕体部破片、赤焼き土器杯、須恵器破片がある。第23図6～8はロクロ調整の土師器杯である。5



9号井戸跡				10号井戸跡			
土	色	土質	場所	土	色	土質	場所
1 黒色(10YR4/2)	シルト	地山側・地山物を多く含む	地化物を若干含む	1 黒色(SV5/1)	緑	地山ブロックを含む	
2 黒色(10YR1/2)	粘土質シルト	地山側・地山物をまばらに含む		2 黒褐色(10YR5/6)	緑	地山色を土質構成に含む	
3 黒色(5YR2/2)	粘土質シルト	地山側をまばらに含む		3 小さな黒褐色	シルト質粘土	地山色をブロック・地山物を含むに、更に地山ブロックを含む	
4 黒色(2.5YR2/2)	シルト質粘土	地山側を若干含む		4 黒褐色(10YR3/3)	緑	地山色を構成は含む	
5 黒色(2.5Y2/2)	粘	地		5 黒褐色(10Y2/2)	緑	地山物やブロックをまばらに含む	
泥炭地(2.5Y6/6)	粘土質シルト	{		6 黒褐色(10Y2/2)	シルト質粘土	地山物をまばらに、下部に地化物を含むに含む	

11号井戸跡				12号井戸跡			
土	色	土質	場所	土	色	土質	場所
1 黒色(10YR2/2)	シルト	地山側・地化物を若干含む		1 黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山物をまばらに、下部に地化物を含むに含む	
2 黒褐色(2.5Y4/4)	シルト	地山側・地山物をまばらに含む		2 黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山色をまばらに含む	
3 黒褐色(2.5Y3/3)	シルト質粘土	地山側をまばらに含む		3 黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山色をまばらに含む	
4 黒褐色(10Y4/5)	粘	地山側を若干含む		4 黒褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	しまりあり・地山側をまばらに含む	
泥炭地(2.5Y6/6)	粘土質シルト	{		5 黒褐色(10Y2/2)	緑	地山物やブロックをまばらに含む	

13号井戸跡				14号井戸跡			
土	色	土質	場所	土	色	土質	場所
1 黒色(2.5Y3/3)	シルト	地山側・地化物を若干含む		1 黒色(10YR2/2)	シルト	地化物を含む	
2 黒褐色(2.5Y3/3)	シルト	地山側・地山物を若干含む		2 黒褐色(10Y8/4)	緑	地	{
3 黒褐色(2.5Y3/3)	シルト質粘土	地山側・地化物を若干含む		3 小さな黒褐色	地	断面間に1cm程の黒色粘土質シルトを含む	
4 黑褐色(10YR3/3)	緑	地山色を土質上・地山ブロックをまばらに含む		4 黑褐色(10YR1/2)	緑	土	
泥炭地(2.5Y6/6)	粘土質シルト	{		5 小さな黒褐色(10YR4/3)	緑	3層よりも粒子大きい	

第21図 井戸跡平面・断面図

### III. 桃生田前遺跡

は赤焼き土器杯である。

#### 24号土塁

調査区北側に位置する。3号住居跡外周溝、16号土塁よりも古い。平面形は楕円形で長軸65cm、短軸45cm、深さ14cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層で黒~灰黄褐色砂質シルトで自然堆積とみられる。遺物は土師器甕胴部破片が出土している。

#### 46号土塁

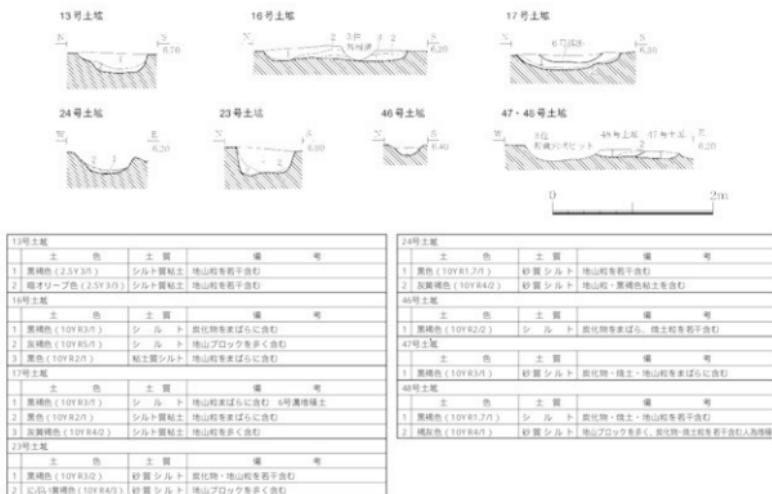
調査区中央西側に位置する。2号住居跡より古く、2号住居跡掘方埋土除去後地山面で確認したものである。径35~40cmの円形であり、深さは16cmほどである。断面は「U」形である。堆積土は黒褐色シルトで、自然堆積とみられる。堆積土中から土師器甕口縁部が出土している。

#### 47号土塁

調査区北側に位置する。3号住居跡より古く、3号住居跡掘方埋土除去後地山面で確認したものである。48号土塁より古い。規模は長軸90cm、短軸45cm以上の楕円形であり、深さは10cmである。底面は平坦で、断面は「U」形である。堆積土は黒色シルトで、自然堆積とみられる。堆積土中から土師器破片が出土している。

#### 48号土塁

調査区北側に位置する。3号住居跡より古く、3号住居跡掘方埋土除去後地山面で確認したものである。47号土塁より新しい。規模は90cm、短軸55cm以上の楕円形であり、深さは10cmほどである。断面は「U」形である。堆積土は2層にわけられ、1層は黒褐色シルトで自然堆積、2層は地山土を



第22図 土塁平面・断面図

多く含む褐灰色砂質シルトで人為堆積とみられる。堆積土中から土師器などが出土している。

## 6 . 溝跡と出土遺物

5号溝跡は調査区南側に位置する東西溝、6号溝跡は調査区中央に位置するT字状に伸びる南北～東西溝である。いずれも底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。調査区内で最も新しい。堆積土はいずれも褐色砂質粘土質シルト～灰黄褐色砂でやわらかく、粘性はない。5号溝跡と6号溝跡は堆積土が類似することから同時に存在したと考えられる。7号溝跡は調査区北側に位置する東西溝である。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘土質シルトでやわらかく、粘性がある。5～7号溝跡からは土師器、須恵器、近世陶器、土師質土器が出土した。溝跡は住居跡を切っているため、溝跡堆積土内に流れ込んだ遺物を多く含む。

第23図10～12は5号溝跡から出土した遺物である。10・11は須恵器である。12は土師質土器杯である。第24図1は6号溝跡出土の砥石であり、材質は凝灰岩製である。

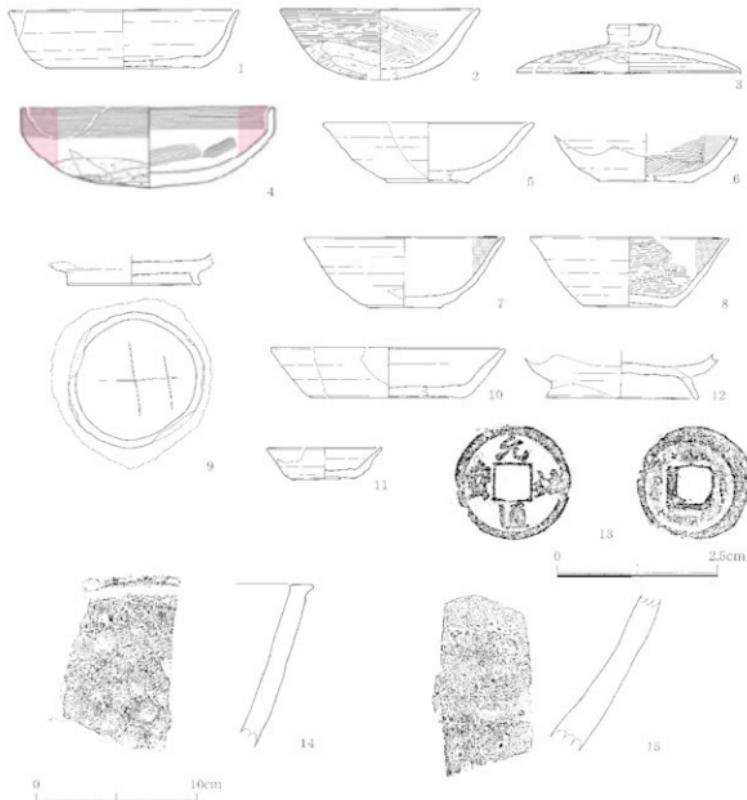
## 7 . 表土、その他の出土遺物

第23図9は出土地点不明の須恵器高台付杯底部である。底面には「廿」のヘラ記号がみられる。13は調査区西側の烟から出土した古銭で、北宋銭（元祐通宝、初鑄年1086年）である。

このほかに若干ではあるが近世の陶磁器類が出土している。

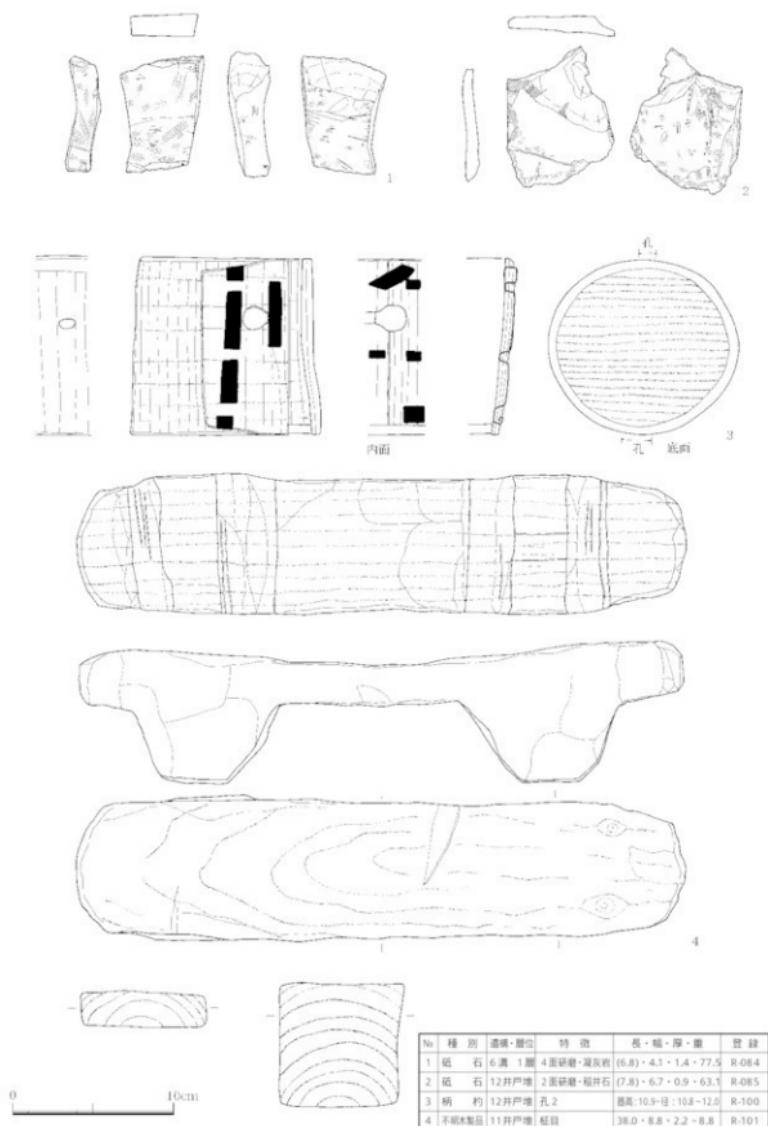
註1 中世陶器や同器形の摺鉢については多賀城市埋蔵文化財調査センター千葉孝弥氏からご教示をえ、新田  
遺跡出土の中世陶器や摺鉢を実見させていただいた。

III. 桧生田前遺跡



No.	種別	遺構・層位	調査	形態	基面・口径・底径	登録
1	須惠器	井戸堆外：ロクロナデ・灰SY7/1 底：圓転ヘラ切り→ナデ 内：ロクロナデ・灰白SY7/1			33・14.2・8.8	R-054
2	土師器	井戸堆外：ヨコロナデ・ヘラケズリ・内：ルイ(黄褐)10YR6/0 底：ヘラケズリ 内：ヘラミガキ・内：ルイ(黄褐)10YR6/0 (4.3)・12.2・-			R-053	
3	須恵器	土塁上：ヨコロナデ・横1手持ヘラカズリ・壁7SYR7/6 つまみ：リング状 内：ロクロナデ・裡7SYR7/6 軽質			3.0・13.8・-	R-057
4	土師器	土塁上：ヨコロナデ・朱彩・内：ルイ(黄褐)10YR7/0 底：ヘラカズリ 内：ヨコロナデ・朱彩・淡黄褐10YR8/0			4.9・15.4・8.0	R-012
5	赤繪土器	土塁上：ヨコロナデ・根2.5YR7/6 底：圓転系切り 内：ロクロナデ・根2.5YR6/6			3.7・12.8・5.2	R-034
6	土師器	土塁上：ヨコロナデ・根2.5YR6/6 底：圓転系切り 内：ヘラミガキ・黒色絞理・黒2.5Y2/1			4.3・12.2・5.6	R-031
7	土師器	土塁上：ヨコロナデ・淡黄褐10YR8/4 底：圓転系切り 内：ヘラミガキ・黒色絞理・黒2.5Y3/1 (2.8)・-・5.6			R-032	
8	土師器	土塁上：ヨコロナデ・内：ルイ(褐)9YR7/6 底：圓転系切り 内：裏色絞理・器面削落・黒10YR1.7/1			4.4・12.2・4.6	R-033
9	須恵器	高台付近：不明 外：ロクロナデ・灰10YR5/1 底：不明→ヨビナデ・ヘラ記号「廿」 内：ロクロナデ・灰白10Y6/1 (1.3)・-・8.0			R-058	
10	須恵器	溝 壇 外：ヨコロナデ・灰2.5Y7/1 底：圓転ヘラ切り→ヨビナデ 内：ロクロナデ・灰2.5Y7/1			3.1・14.4・9.2	R-055
11	土師鏡	高台付近：溝 壇 外：ヨコロナデ・根5YR6/6 底：圓転系切り 内：ロクロナデ・根5YR6/6			1.9・7.2・3.9	R-030
12	須恵器	溝 壇 外：ヨコロナデ・根7SYR8/6 底：圓転ヘラ切り→ヨビナデ 内：ロクロナデ・根7SYR7/6 軽質			(2.7)・-・9.4	R-052
13	吉銭	調査区西側 元治通宝(北宋銭・初鋤年1086年)			18.3	R-086
14	中世陶器	井戸堆外：ナデ・指圧痕・褐色10YR4/1 内：ナデ・使用痕・灰黃10YR7/2 在地産？			- - - -	R-080
15	中世陶器	井戸堆外：ナデ・灰SY6/0 内：薄灰により不明・墨黒2.5Y3/2 產地不明			- - - -	R-081

第23図 井戸跡・土塙・溝跡出土遺物（1）



第24図 井戸跡・土塙・溝跡出土遺物(2)

掘立柱建物跡属性表①

遺構名	位置	構造・特徴	規 模 ( 総長 )	柱 間 ( m )	方 向	備 考
25建	中央 東 西 棟	桁行3間 梁行2間	( 5.14 ) 北桁 ( 3.32 ) 北妻 梁行1間 ( 2.75 ) 西妻	1.84+1.54+1.76 1.86+1.96 2.25+a 2.75	N20°W	古代
26建	中央 東 西 棟	桁行1間以上 ( 2.25+a ) 梁行1間	南桁 ( 2.75 ) 西妻	2.25+a 2.75	N4°W	
27建	中央 東 西 棟	桁行4間 梁行3間	( 7.10 ) 東桁 ( 6.70 ) 南妻	1.90+2.10+1.00+2.10 1.50+5.22	N18°E	41建より古 間仕切り・廂あり
28建	中央 北 東 西 棟	桁行3間 梁行1間	( 6.07 ) 北桁 ( 3.40 ) 西妻	1.90+2.17+2.00 3.40	N1°E	2・4住より新
29建	中央 東 南 北 棟	桁行2間 梁行1間以上 ( 1.92+a )	西桁 ( 5.02 ) 北妻	2.20+2.83 1.92+a	N7°W	
30建	南 東 南 北 棟	桁行3間 梁行2間	( 6.16 ) 西桁 ( 3.20 ) 北妻	1.95+2.00+2.16 1.35+1.80	N25°E	35建・5溝より古
31建	中央 央 南 北 棟	桁行2間 梁行1間	( 4.80 ) 西桁 ( 4.41 ) 北妻	2.40+2.40 4.41	N16°E	2住より古、12井と重複
32建	中央南東 縦柱式	桁行5間 梁行2間	( 4.32 ) 東桁 ( 4.10 ) 北妻	2.22+2.10 2.30+1.90	N6°E	51建より古、33建より新
33建	中央南東 南北棟	桁行3間 梁行2間	( 3.34 ) 西桁 ( 3.32 ) 北妻	1.19+1.00+1.22 2.15+1.10	N2°W	32建より古、36・53建より新
34建	中央南東 南北棟	桁行3間 梁行2間	( 6.00 ) 西桁 ( 5.38 ) 南妻	2.50+1.63+1.84 3.00+2.38	N5°E	11井と重複
35建	中央南東 東西棟	桁行3間 梁行3間	( 6.90 ) 南桁 ( 4.08 ) 西妻	3.35+2.40+1.10 1.74+1.08+1.30	N3°W	30建より新
36建	中央南東 南北棟	桁行3間 梁行2間	( 5.82 ) 西桁 ( 4.00 ) 北梁	3.62+2.00 2.06+1.94	N6°E	33建より古
37建	南北隅 南北棟か	桁行1間以上 ( 3.75+a ) 梁行2間以上 ( 2.15+a )	東桁 北妻 a+2.15+2.20	3.75+a a+2.15+2.20	N33°E	1住より新
38建	北 東 隅 南北棟	桁行3間以上 ( 10.00+a ) 梁行1間	西桁 ( 4.40 ) 南妻	a+3.20+3.40+3.40 4.40	N18°E	4住より新
39建	南北隅 東西棟	桁行3間以上 ( 8.30+a ) 梁行2間以上 ( 5.10+a )	西桁 南妻 a+2.20+6.10 2.70+2.40+a	N29°E	1住より新、5溝より古 間仕切りあり	
40建	南北隅 東西棟	桁行4間以上 ( 8.30+a ) 梁行1間以上 ( 3.10+a )	北桁 西妻 1.37+0.39+1.40+1.78+2.64+a 3.10+a	N7°W		
41建	中央 南北棟	桁行3間 梁行2間	( 11.60 ) 西桁 ( 7.50 ) 北妻	5.75+3.50+2.45 3.70+3.80	N4°E	27・60建より古、間仕切り・廂あり
42建	南北隅 南北棟	桁行2間 梁行2間	( 4.90 ) 西桁 ( 4.15 ) 南妻	1.50+3.40 2.20+2.20	N28°E	1住より新、間仕切りあり
43建	南北隅 東西棟	桁行2間以上 ( 6.00+a ) 梁行2間	北桁 ( 4.40 ) 東妻	a+3.10+2.90 2.40+2.05	N9°E	1住より新
45建	南北隅 南北棟	桁行2間 梁行不明	( 4.00 ) 西桁	1.60+2.50	N27°E	1住より新
49建	南北隅 南北棟	桁行2間 梁行1間以上 ( 3.00+a )	西桁 東妻 1.60+a	3.00+3.50 1.90+a	N13°E	
50建	南北隅 東西棟	桁行2間 梁行1間	( 2.60 ) 北桁 ( 2.60 ) 北妻	1.75+0.80 2.60	N48°E	
51建	南北隅 南北棟	桁行2間 梁行2間	( 4.10 ) 西桁 ( 2.85 ) 北妻	1.25+2.85 1.50+1.40	N42°E	32建より新
52建	南北隅 東西棟	桁行3間以上 ( 3.70+a ) 梁行1間以上 ( 1.40+a )	北桁 西梁 1.35+1.30+1.20+a 1.40+a	西梁 1.40+a	N48°E	

掘立柱建物跡属性表②

遺構名	位置	構造・特徴	規 模	(縦長)	柱 間(m)	方 向	備 考
53建	南東隅	東西棟	桁行4間 梁行4間	(8.10) (6.75)	北桁 2.10+2.10+1.90+2.20 西妻 1.10+2.20+1.90+1.50	N16°E	33建より古
54建	中央南	南北棟	桁行2間 梁行2間	(3.20) (2.30)	西桁 1.62+1.58 南妻 1.50+0.80	N17°W	12井と重複
55建	中央南	南北棟	桁行3間 梁行1間	(6.00) (2.58)	西桁 2.40+1.60+2.00 南妻 2.58	N25°W	12井と重複
56建	南東隅	南北棟	桁行不明 梁行2間	(4.40)	北妻 2.20+2.20	N79°W	
57建	中央東	南北棟	桁行2間 梁行1間以上(3.00+a)	(6.50) (3.00+a)	西桁 3.00+3.50 南妻 3.00+a	N12°W	
58建	南西隅	東西棟	桁行2間以上(4.60+a) 梁行1間以上(2.28)		北桁 a+2.30+2.30 北妻 2.28	N30°E	12井より古、5溝より新
59建	南東	南北棟	桁行3間 梁行1間	(2.20) (1.60)	東桁 0.65+0.90+0.70 北妻 1.60	N13°W	
60建	南東隅	東西棟	桁行2間以上(3.85+a) 梁行2間以上(3.00+a)		北桁 1.85+1.90+a 西梁 1.10+1.90+a	N13°E	41建より古
62建	中央	南北棟	桁行2間 梁行2間	(4.45) (3.08)	東桁 1.85+2.60 北梁 1.45+1.63	N4°E	

土塙属性表

遺構名	位 置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆 積 土	備 考
13土	中 央	橋 円 形	箱 形	0.9	0.8	0.3	黒褐色・黒オリーブ色シルト質粘土(自然)	
16土	北 側	陣丸方 形	箱 形	1.4	1	0.2	黒褐色シルト・灰褐色シルト(自然・人為)	3住外周溝より古、2住外周溝・24土より新
17土	中央東側	陣丸方 形	皿 形	0.8	-	0.2	黒色 - 灰黄褐色シルト質粘土(自然)	6溝より古
20土	北 側	円 形	皿 形	0.7	0.6	0.1	黄色シルト(自然)	
21土	北西隅	橋 円 形	U 形	1.4	0.9	0.04	黒褐色シルト(自然)	
22土	北西隅	不正方形	U 形	0.7	0.4	0.04	黒褐色シルト	底面直上より土器出土
23土	中 央	長 方 形	箱 形	0.7	0.5	0.4	黒褐色 - ぶい黄褐色砂質シルト(自然)	
24土	北 側	円 形	U 形	0.7	0.5	0.4	黒色 - 灰黄褐色砂質シルト(自然)	3住外周溝・2住外周溝・16土より古
46土	中 央	円 形	U 形	0.7	0.5	0.4	黒色シルト(自然)	2住より古
47土	北 側	橋 円 形	U 形	0.9	0.5	0.4	黒色シルト(自然)	3住より古、48土より古
48土	北 側	橋 円 形	U 形	0.9	0.5	0.4	黒色シルト(自然) - (人為)	3住より古、47土より新
61土	南 側	円 形	か	-	0.8	-	黑色シルト	

井戸跡属性表

遺構名	位 置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆 積 土	備 考
9井	北 側	円 形	逆台形	1.2	0.9	0.5	自然(1層)人為(2・3層)	
10井	中央東	円 形	内筒形	1.2	1.1	1	自然堆積	灰白含む
11井	中 央	円 形	内筒形	2.4	2.3	2.9	自然堆積	34建と重複
12井	中 央	不正円形	漏斗形	3.2	2.8	2.9	自然堆積	31・54・55建と重複、階段状の施設
19井	東 側	円 形	内筒形	0.9	0.8	0.9	自然堆積	

溝跡属性表

遺構名	位 置	総長	上幅	下幅	深さ	断面形	方 向	堆 積 土	備 考
5溝	南 側	23.0	1.8	0.5	0.4	U 形	東 西	褐色砂質シルト - 灰黄褐色砂(自然)	6溝と一連か
6溝	南・中央	45.0	2.4	0.5	0.4	U 形	西北・東北	褐色砂質シルト - 灰黄褐色砂(自然)	5溝と一連か
7溝	北 側	4.0	1.1	0.8	0.2	U 形	東 西	黑色シルト(自然)	3住外周溝より新
44溝	中 央	1.9	0.4	0.2	0.2	U 形	東 西	黒褐色砂質シルト(自然)	2住より新、4住外周溝より古

## 8. 考 察

### [ 1 ] 古代

古代と考えられる遺構には、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土塹8基があり、各遺構からは土師器・須恵器・土製品・石製品・鉄製品が出土している。

#### ( 1 ) 竪穴住居跡

##### A. 重複関係

今回の調査では、4棟の竪穴住居跡が検出された。そのうちの3棟で重複がみられ、古い順に2号住居跡→3号住居跡→4号住居跡と変遷している。

##### B. 遺物の検討

竪穴住居跡からは、非口クロ調整の土師器杯・甕・鉢・須恵器杯・高台付杯・杯蓋・壺・甕が出土している。最も遺物の出土量の多い3号住居跡を中心に検討する。

3号住居跡からは、床面・カマド構築土及び崩壊土中から遺物が出土している。これらは住居跡に伴うものと考えられる。また、3号住居跡外周溝上層からまとまって土器が出土している。3号住居跡外周溝は、4号住居跡外周溝に切られることから、4号住居跡構築時より先行する遺物である。明確に3号住居跡に伴うかは言及できないが、3号住居跡廃棄時、もしくは、ごく短い期間に投棄された遺物と考えられる。したがって、外周溝上層出土土器は、3号住居跡廃絶時前後のまとまった遺物と考えられる。

次に3号住居跡一括遺物と外周溝上層出土遺物について検討する。床面及びカマド構築土出土の土器に土師器杯・甕・須恵器杯・杯蓋・長頸壺・甕がある。土師器杯には銅柾を模倣したと考えられるものや平底のものがあり、ミガキ調整を主体としている。また、破片ではあるが、有段丸底のものもみられる。甕は長胴形で頸部に段をもつものである。須恵器杯は底部から直線的に立ち上がる低平なもので、底部は全面に手持ちヘラケズリが施され、切り離しは不明である。杯蓋はいずれもつまみ部は欠損するが、天井部に軽い手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリを施すものがある。手持ちヘラケズリを施す杯蓋のつまみはリング状を呈すると考えられる。

外周溝上層出土土器は、土師器杯・椀・甕・須恵器杯・高台付杯・杯蓋・長頸壺・短頸壺・甕がある。土師器杯は、丸底で体部中位や下部に段あるいは沈線がみられるものとそれらがみられないものがある。器面調整は、段、沈線を境に口縁部が横ナデ、体部がケズリを主体とするものとミガキを主体とするものがある。椀は体部に段をもたないので、ケズリの後ミガキが施される。甕は頸部に段をもつ長胴形のものである。須恵器杯は底部から膨らみをもって立ち上がる低平なもので、底部切り離し不明で体下部から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。高台付杯は底部から外傾して直線的に伸びるものと内湾しながら立ちあがるものがあり、いずれも高台は短い。法量の違いにより、大小の2種がある。杯蓋はつまみがリング状で、天井部に軽い手持ちヘラケズリが施されるものと、つまみ部は欠損して不明であるが、天井部に回転ヘラケズリが施されるものがある。短頸壺は体下部に回転ヘラケズリが施されるものである。

以上、住居跡一括遺物と外周溝上層出土遺物の特徴を示した。上述のようにいずれも4号住居跡を

床面（カマド構築材含む）	貯蔵穴状ヒットを覆うカマド崩壊土	堆積土
外周溝	住居	

第25図 3号住居跡出土遺物

下限とする。また、土師器杯・甕、須恵器杯蓋の特徴が類似することから、3号住居跡機能時から廃絶時前後という時間幅はもつものの、ある程度時間を限定できる資料として扱うことができよう。

3号住居跡出土土器に類似する資料は、志波姫町御駒堂遺跡第22号住居跡(小井川・小川:1978)、田尻町新田柵推定地S I 73 b住居跡(三好・笠原:1997)、瀬峰町大境山遺跡2号住居跡(阿部・赤沢:1983)などに認めることができる。御駒堂遺跡第22号住居跡では土師器杯に丸底と平底があり、外面に沈線や軽い段をもつものとそれらがないものがある。調整はミガキを主体とする。甕には頸部に段が見られないものも含まれる。新田柵推定地S I 73 b住居跡では、土師器杯は内外面に段をもつもので、粗いミガキ調整を主体としている。ロクロ土師器や球胴形の土師器甕など、本住居跡では見られない器形が含まれる。また、須恵器杯は小型のものが含まれ、法量分化が認められる。大境山遺跡2号住居跡は、杯では棱または段を境に口縁部に横ナデ、体部にケズリ調整されるという特徴をもつものが多く含まれる。土師器鉢が含まれ、須恵器高台付杯、杯蓋は欠損することから、それらとの比較はできない。

次に土師器杯、須恵器杯、杯蓋について比較する。本住居跡出土土師器杯には、ミガキを主体とするものと横ナデ、ケズリを主体とするものがほぼ同数含まれている。御駒堂遺跡第22号住居跡、新田柵推定地S I 73 b住居跡では横ナデ、ケズリ調整のものがほとんど含まれないことから大境山遺跡2号住居跡に近いものと考えられる。須恵器杯の切り離しは、御駒堂遺跡第22号住居跡では回転ヘラ切り、新田柵推定地S I 73 b住居跡では回転ヘラ切りのちナデ、大境山遺跡2号住居跡では回転ヘラ切りのちケズリ調整が加えられる。本住居跡出土土器では、体部下端から底部全面に手持ちケズリが施されるもので、ケズリ再調整が加えられることから大境山遺跡2号住居跡に類似すると考えられる。須恵器杯蓋についてみると御駒堂遺跡第22号住居跡、新田柵推定地S I 73 b住居跡では新しい様相のものを含んでいる。

したがって、本住居跡出土土器は、8世紀後半と考えられる御駒堂遺跡第22号住居跡や新田柵推定地S I 73 b住居跡より古く、8世紀中ごろと考えられる大境山遺跡第3土器群に近い様相をもつことから、ほぼ同時期の8世紀中葉と考えられる。

2号住居跡からは、床面から体部がほぼ直線的に外傾する平底の土師器杯が出土している。堆積土からも同様の器形の杯が出土している。これらは調整に違いが見られるが、同時期のものと考えられる。大境山遺跡第3土器群土師器杯D I類に類似し、重複関係から、3号住居跡より古い8世紀中葉と考えられる。

4号住居跡カマド右側床面直上から土師器甕、須恵器杯が出土した。これらは住居跡に伴うものである。土師器甕は体部に明瞭な段を有し、口径と器高がほぼ同じである体部に丸みをもつ小形のものである。須恵器杯は口径に対し底径が大きく器高の低いもので、底部から膨らみをもって立ち上がり、直線的に外傾するものである。底部には回転ヘラ切りが施されるもので、重複関係から3号住居跡よりも新しく、8世紀中葉から後半ごろと考えられる。

上記のように、2・3・4号住居跡出土遺物は、その特徴から東北地方南部における土器編年の国分寺下層式期(氏家:1957、1967)にあたると考えられる。重複関係から、2号住居跡は3号住居

跡より古い8世紀中葉、3号住居跡が8世紀中葉、4号住居跡が3号住居跡より新しい8世紀中葉から後半と考えられ、時間幅は短いと考えられる。1号住居跡は削平により残存状況は悪く、出土遺物は少ないが、土師器はいずれも非ロクロ調整で、ロクロ土師器を含まないことから、大きく8世紀代に位置づけられるものである。

#### C . リング状のつまみをもつ須恵器杯蓋について

3号住居跡、16号土塹からはリング状のつまみをもつ杯蓋が出土した。特徴は次のとおりである。①器高は低平で天井部からほぼ直線的に外傾するもので、口縁端部は短く下方に折れ曲がる。②天井部はいずれも軽い手持ちヘラケズりが施される。③リングは肉厚であり、端部は丸い。径3cmほどであり、高台状に退化したものではない。④器高におけるリング高の割合が大きい。⑤いずれも焼成不良のため軟質であり、色調は橙色～灰白色である。⑥年代は器形や3号住居跡出土土器から8世紀中葉と考えられる。

大境山遺跡では、8世紀中ころの第3土器群で杯蓋が欠損するため具体的な検討できない。他の時期や表土出土のものにも上記の特徴をもつ杯蓋は含まれず、蓋のつまみは宝珠形が主体となる。町内の他の調査例でも確認されていない。また、隣接する田尻町、高清水町でも管見の範囲では確認していない。田尻町八幡遺跡（小村田：1991）では、8世紀前半（中葉に近いとされている）ころの杯蓋が出土している。リング状のつまみをもち、器形は直線的に外傾するもので、本遺跡出土のものと類似する。しかし、リングの形態や天井部に調整が施されないものと回転ヘラケズりが施されるものがあるなど違いがみられる。八幡遺跡出土の杯蓋は、特徴から近接する田尻町木戸窯跡（野崎：1974、辻：1984）で焼成されたと考えられている。本遺跡出土の杯蓋と木戸窯跡の杯蓋は、全体的な器形は類似するが細部が異なることから、木戸窯跡以外で焼成されたと考えられる。現状では資料不足であり、今後消費地におけるリング状の杯蓋の検出に努めるとともに、この製品を焼成した窯跡を発見することが必要である。

#### D . 土鈴について

特殊な遺物として3号住居跡外周溝から出土した土鈴2点がある。いずれもつまみ部のみで、土師質のものと須恵質のものがある。遺跡周辺では岩石I遺跡第1次調査竪穴遺構（三宅、佐藤：1975）、長者原II遺跡第2次調査第4号住居跡（瀬峰町教育委員会：1988）から出土しており、須恵質のものは田尻町木戸窯跡（加藤：1975）から出土している。東北地方の土鈴を集められた国生氏（国生：1992）それを基に最新の状況を集成された下山氏（下山：1996）によれば、土鈴は窯業や製鉄にかかわる集団とかかわりをもつ遺物と推定されている。岩石I遺跡第1次調査検出のカマドをもたない竪穴遺構は平安時代のもので、羽口の出土から小鍛冶を行っており、上記の推定と一致する。本遺跡では、後述するように4号住居跡で鍛冶を行っていたと考えられるが、3号住居跡外周溝は重複関係からそれ以前であり、用途、性格を判断することはできなかった。

#### E . 遺構の検討

ここでは、住居跡の施設について若干の検討を行う。

カマドは3棟で確認された。いずれも北側に付設している。また、残りの1棟も焼け面やカマド内

に堆積した最下層が残存する状況から、北側に付設されていたと考えられる。したがって、カマドの方向には斉一性が認められる。

4号住居跡中央付近から上面に炭化物が見られる土塙が検出された。長軸130cm、短軸117cm、深さ40cmの略円形を呈し、人為的に埋めもどされている。底面や壁面からは焼け面は確認されていない。床面や堆積土からは炉壁と考えられるスサ入りの粘土塊、土塙堆積土からは鉄滓など鍛冶に関係する遺物が出土している。炉壁と考えられる粘土塊が出土していることから、何度かの操業が行われた後炉本体は壊されたものと考えられる。住居跡中央を後世の溝跡で破壊されており、残存する床面からは炉跡は検出されていない。土塙の具体的な機能は不明であるが、防湿を目的とした掘方の可能性を考えたい。住居構造では壁際には壁柱がみられることから、住居内部の空間を広くとり、作業スペースを作りだそうとする意識を伺うことができる。したがって、ここでは、上記の状況から4号住居跡内で鍛冶が行われたと想定したい。

#### (2) 建物跡

25号建物跡は桁行3間、梁行2間の東西棟である。調査区東側に所在し、柱穴の規模、住居跡との重複がなく、柱列の方向が住居跡の方向とほぼ一致することから古代の建物跡と考えられた。柱穴から非ロクロ調整の土師器、須恵器が出土している。住居跡と方向がほぼ一致することから同時に存在したと考えられ、8世紀中葉以降と考えられる。特に3号住居跡と方向が一致することから、3号住居跡と同時期の可能性もある。

#### (3) 井戸跡

10号井戸跡からは土師器の細片が若干出土しているのみであったが、堆積土上層に灰白色火山灰が認められることから、古代の遺構と考えられる。住居跡、建物跡と離れた調査区東側の遺構があまり認められない地点に位置している。田尻町金鑄神遺跡（小村田：1992）などでは井戸跡はほぼ同時期の住居跡や建物跡とは離れた地点に位置している。10号井戸跡も同じあり方であることから、住居跡と同じ8世紀代のものと考えられる。

#### (4) 土塙

古代と考えられる土塙は8基検出された(13・16・20・22・24・46・47・48号土塙)が、性格や年代を把握できるものは少ない。ここでは、器形が判明する遺物が2個体以上出土した22号土塙について検討する。

22号土塙からは、ロクロ調整の土師器杯、赤焼き土器杯、土師器長胴甕胴部破片、須恵器破片が出土した。検出面上面 = 底面直上から出土したもので、一括投棄されたものと考えられる。

土師器杯は口径12cm台、器高4cm台であり、口径に対し底径の割合が小さいものである。切り離しはいずれも回転糸切りである。赤焼き土器杯は口径12cm台、器高4cm台であり、口径に対し底径の割合が小さいものであり、底部から内湾しながら立ち上がり、体部は外傾し口縁部に至るものである。

22号土塙出土土器の特徴は①土師器が主体であること、②土師器杯、赤焼き土器杯とともに口径が12cm台であり、口径12cm以下の小形杯、小皿、高台碗が共伴しないことこと、③底部切り離しがいずれも回転糸切り無調整であることがあげられる。資料が少なく、検討には制限があるが、仙台市藤

田新田遺跡 S D 3 0 2 C 河川跡（村田：1994）出土土器や山王遺跡多賀前地区第4土器群（佐藤憲：1996）などと類似しており、概ね10世紀前半ころの年代が考えられる。

## [ 2 ] 中近世

中近世の遺構と考えられるものに掘立柱建物跡32棟、井戸跡3基がある。

掘立柱建物跡は32棟検出された。柱穴からは時期が判明する遺物は出土せず、時期を確定することは出来ない。柱穴の形態、平面形から、概ね中世から近世にかけてのものと考えられる。ほとんどのものが桁行2~4間、梁行1~2間と規模の小さいものであるが、廂をもつ27号建物跡や39・41号建物跡などやや規模の大きいものも見られる。これらは方向により大きく3類に分類できる。A類はほぼ真北方向のもの、B類は北で東に傾くもの、C類は北で西に傾くものである。A類が中央南側、B類は南西隅、C類は東側に分布が片寄る。重複関係のあるものではB I類→A類→B II類と変遷する。また、各類は調査区南西隅や中央で重複、あるいは同時に存在できないものがあり、各類内でも変遷したと考えられる。B I類に分類された39号建物跡の柱穴は他の調査例（築館町八沢要害遺跡など）から近世の建物跡の可能性もある。C類はA・B類と位置的な重複関係がほとんどなく、同時期に存在することも可能である。このため、詳細な変遷をあうことはできない。なお、建物跡はさらに西側、南側及び東側に広がることが想定されるが、地形から屋敷の中心は西側にあると考えられる。

井戸跡は重複関係、堆積土の状況、出土遺物から中世から近世にかけてのものと考えられる（9、11、12号井戸跡）。これらはいずれも素掘りのもので、建物跡と重複あるいは近接するものである。12号井戸跡は新旧関係をとらえることは出来なかったが、31・54・55号建物跡と重複する。

なお、溝跡は3条（5・6・7号溝跡）あるが、いずれも柱穴より新しく、堆積土の状況から近世以降と考えられた。したがって、屋敷を区画する施設とは考えられない。

遺物は、井戸跡や溝跡の堆積土から中世陶器、土師質土器、木製品が、表土から近世陶器が若干出土している。中世陶器には、在地産の可能性が考えられる摺鉢、産地不明の甕体部破片であり、概ね13~14世紀ころの年代が考えられる。

調査区周辺に関する古文書は現在確認されていないが、葛西氏の家臣といわれる白鳥氏に伝わる『白鳥氏系図』には、中世末に白鳥下記元任の代に藤沢村小野寺氏を頼り桃生田屋敷に帰農したとの記載がある（鈴木：1922）。その後、忠実の代に山根中屋敷に移転したという。桃生田屋敷は調査区周辺との意見もある（瀬峰町：1966）。昭和55年に調査区西側約100mの地点で宅地造成の際、柱材を伴う建物跡が確認された（佐々木・阿部：1982）。遺物は確認されず、時期は不明であるが『系図』の記載から概ね中世末から近世初めと考えられた。今回の調査区で検出された柱穴の分布は密であり、この地が長期間にわたり使用されたことが想定出来る。したがって、『系図』の記載の年代よりさかのぼり、13~14世紀には屋敷が構えられたと考えられる。

調査区南西約500mに位置する牛渕地区には、上部に種子「キリーク」。その下に「正安四年三月日」(1302年)と刻まれた板碑が所在する。13世紀末以降、小山田川沿岸では沖積地に点在する微高地や丘陵に屋敷が構えられ、その周辺の後背湿地が水田として整備されていったことが想定出来る。

## IV . 下富前遺跡

### 1 . 検出された遺構と遺物

事前調査は、水路となり削平される部分について実施され、古代、中近世の遺構、遺物が検出された。検出された遺構には竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、井戸跡4基、土塁、溝跡などがある。遺構はすべて耕作土直下の地山面で検出された。遺構の分布は地区により異なり、北側の1~2区中央付近までは希薄であり、標高が高い2区南端から3区では遺構が集中する。遺物は土師器、須恵器、陶磁器類、石器、金属製品、木製品が出土している。

### 2 . 住居跡と出土遺物

#### 1号住居跡

[位置] 3区中央付近で検出された。

[規模・平面形] 南北3.32m、東西3.10mの正方形である。

[方向] 西邊ではかるとN-36°-Eである。

[堆積土] 2層認められ、地山粒を少量~多く含む黒褐色粘土質シルトである。

[壁] 最も保存の良い北西隅で8cmほど残存し、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

[床面] 掘方埋土を床面としている。床面レベルはほぼ平坦である。掘方底面は若干の凹凸があるが、ほぼ平坦で深さは20cmほどである。埋土は2層認められ、地山粒を多く含む黒色~にぶい黄褐色粘土質シルトである。

[柱穴] 1ヶ所確認した。東辺中央付近に位置する。柱穴は隅丸方形で25cm、深さは20cmである。埋土は地山ブロックをまばらに含む黒褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径13cmほどで、東側に傾斜する。柱が東壁側に傾いていることから、出入り口用の柱の可能性もある。

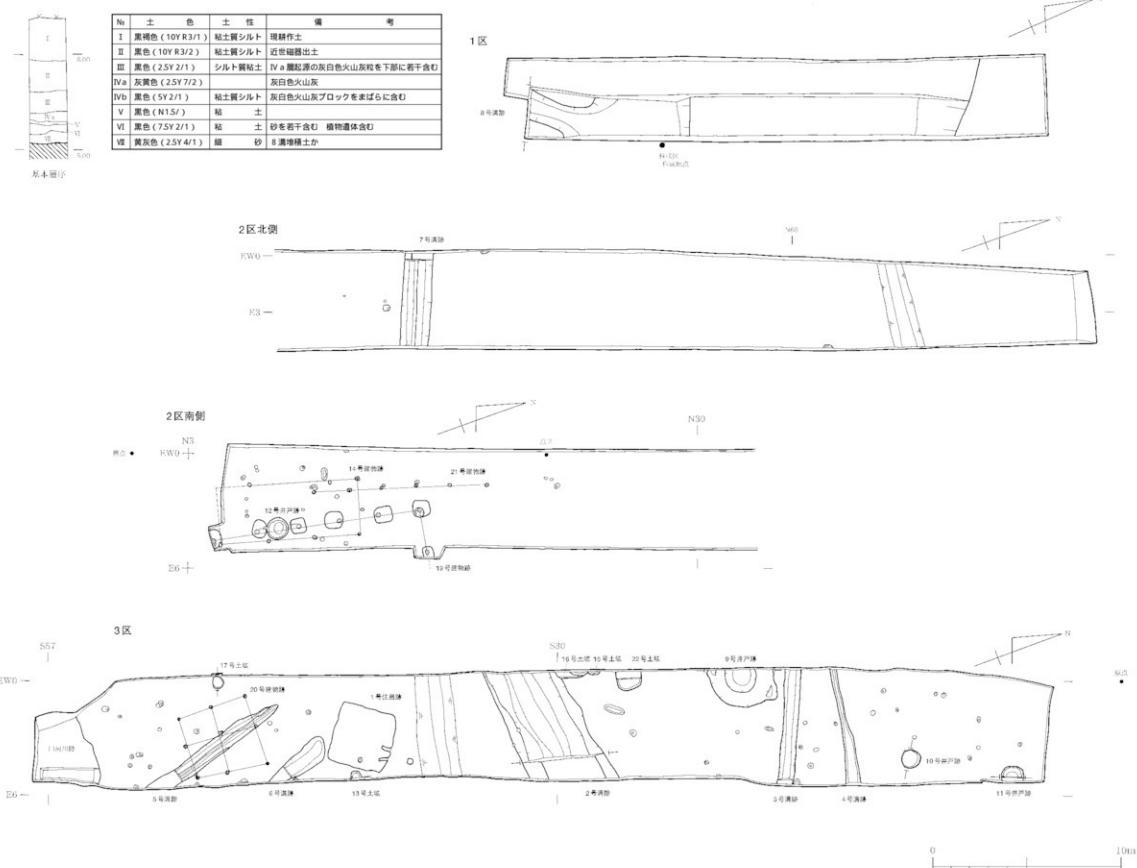
[カマド] 北壁中央東寄りに付設されている。燃焼部は奥行き50cm、幅30cm、底面は煙道部に近づくにつれゆるやかに低くなる。燃焼部側壁は黄褐色粘土を用いて構築されている。燃焼部からは土師器の甕が出土した。煙道部は先端に規模30cm、深さ10cmの煙出しピットをもつ。燃焼部奥壁との距離は250cmである。

[出土遺物] 床面、カマド燃焼部、掘方埋土から非ロクロ調整の土師器や須恵器の破片が出土している。第27図1はカマド燃焼部から出土した土師器甕である。外面には口縁部のナデ調整により頸部に軽い段が認められ、その後体部に縱方向のヘラミガキが施される。

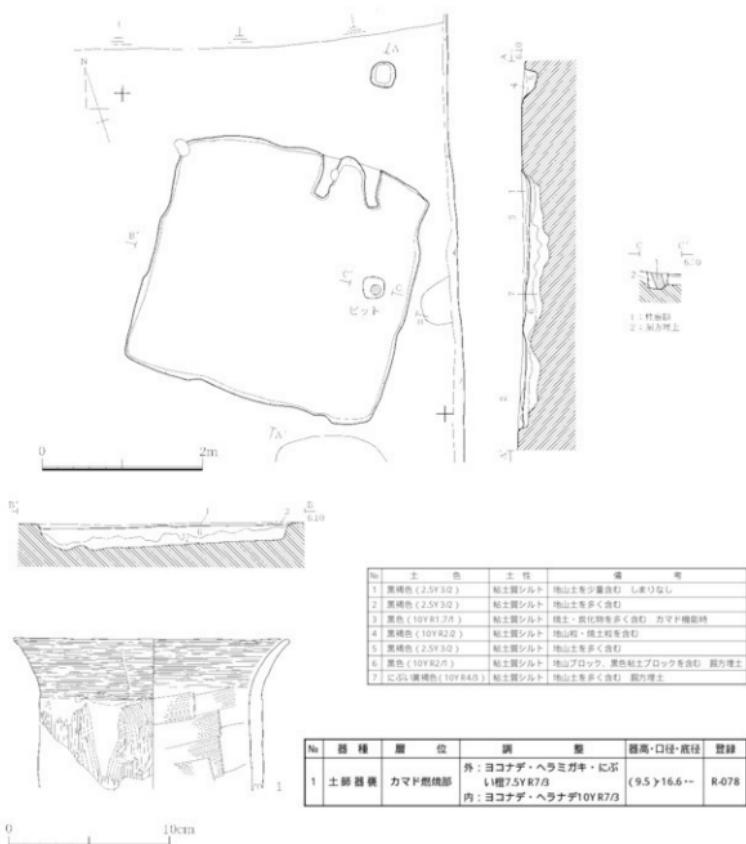
### 3 . 掘立柱建物跡と出土遺物

#### 14号建物跡

2区南側で確認された。19号建物跡より新しい。桁行3間、梁行2間の南北棟である。桁行は東側柱列で5.85m(北から2.00m+1.94m+1.90m)、梁行きは北側柱列は2.35m(西側より1.30m+1.00m)である。方向は東側柱列ではかるとN-18°-Eである。柱穴は8ヶ所確認したが、南西



第26図 遺構配置図

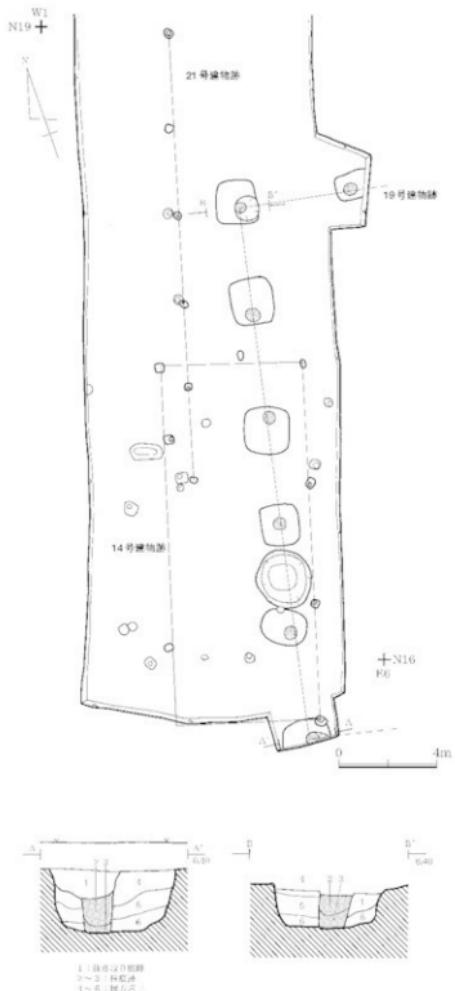


第27図 1号住居跡と出土遺物

隅の柱穴は調査区外となる。いずれも隅丸方形で大きさは14~18cm、深さは23cm程度である。埋土は地山粒をまばらに含む黒~褐灰色粘土質シルトである。柱痕跡は5ヶ所で確認し、径12cm程度である。遺物は出土しなかった。

#### 19号建物跡

2区南側で確認された。14号建物跡より古い。桁行5間以上、梁行1間以上の南北棟である。確認調査時の農道をはさんだ東側のトレーニングでは柱穴は確認されていないため、梁行は3間以内となる。規模は桁行は西側柱列で11.80m (北より2.25m + 2.15m + 2.20m + 2.25m + 2.23m)、梁行は



第28図 14・19・21号掘立柱建物跡

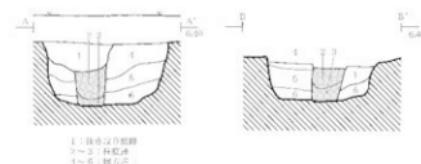
北側柱列で2.28 m +  $\alpha$  である。方向は西側柱列ではかるとN- 12° - Eである。柱穴は7ヶ所で確認され、隅丸方形で径32~46cm程、深さ35cm程である。埋土は黒褐~褐色シルトを主体とし、地山ブロックを多く混入する。柱痕跡はすべてで確認し、径25cm程である。また、2ヶ所で抜き取り痕跡を確認した。柱穴埋土より土師器破片、須恵器破片が出土している。

#### 20号建物跡

3区南側で確認された。5号溝跡より新しい。2間×2間の柱柱建物跡である。規模は北側柱列で3.74m(西から1.70m+2.06)、西側柱列で3.80m(北から1.84m+1.86m)である。方向は西側柱列ではかるとN- 4° - Wである。柱穴9ヶ所で確認され、隅丸方形で大きさは24~12cm、深さは26cm程である。埋土は地山粒+ブロックをまばらに含む黒褐色シルトである。柱痕跡はすべてで確認され、径12cmである。遺物は出土しなかつた。

#### 21号建物跡

2区南側で確認された。規模は桁行5間、梁行不明の南北棟である。総長は桁行は7.38m(北から1.53m+1.49m+1.50m+1.45m+1.50m)、梁行は検出されていない。方向はN- 16° - Eである。柱穴は6ヶ所確認され、隅丸方形であり、大きさは12~14cm程、深さは11cm程である。埋土は地山粒や黒褐色シルト粒を多く含む褐灰色粘土質シルトである。柱痕跡は3ヶ所で確認され、径6cmである。遺物は出土しなかつた。



## 4 . 井戸跡と出土遺物

### 9号井戸跡

3区北側で確認した。西壁にかかるため、平面プランの半分を確認したのみである。平面形は円形を呈し、素掘りの井戸跡である。断面は漏斗状で、底面は中央部がやや低い摺鉢状となる。規模は長径2.7m、深さ1.5mである。堆積土は大別2層にわけられ、1～5層は地山ブロックを多量に含む黒褐～明黄褐色粘土で人為堆積とみられる。6～11層は黒～黒褐色粘土で自然堆積とみられる。10・11層はグライ化している。

出土遺物は堆積土より須恵器、土師器（ロクロ、非ロクロ）、中世陶器、金属製品、木製品、材が出土している。第31図1は須恵器長頸瓶の頸部破片で大戸産とみられる。3は中世陶器の摺鉢であり、内面には使用による摩滅痕跡が認められる。器形などから在地産と考えられる。4は甕体部破片であり、外面に格子状の押印が認められる。常滑産と考えられる。

### 10号井戸跡

3区北側で確認した素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、底面は南東部がやや低い摺鉢状となる円筒形を呈する。規模は径1.0mであり、深さは0.9mである。堆積土は4層にわけられ、黒～黒褐色粘土質シルト～シルト質粘土で自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

### 11号井戸跡

3区北側で確認された素掘りの井戸である。東壁にかかっており、全体を確認することはできない。規模は径1.2m、深さ2.2mである。平面形は円形を呈し、底面はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる円筒形である。堆積土は大別2層で1～5層は地山土・炭化物・焼土粒を含む黒色～黒褐色シルト～粘土質シルトで人為堆積、6・7層は黒褐色粘土質シルト～黒色粘土で自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

### 12号井戸跡

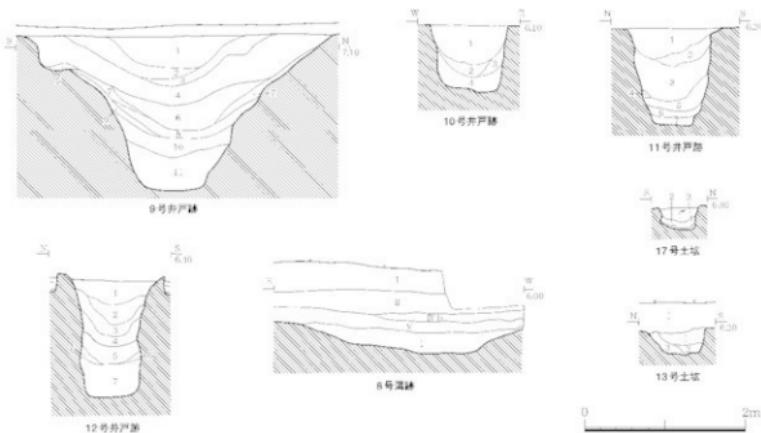
2区南側で確認した素掘りの井戸である。19号建物跡より新しい。平面形は円形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる円筒形である。規模は長径1.2m、短径1.1m、深さ1.5mである。堆積土は大別2層で、1～4層は地山粒を多く含みしまりのある黒色粘土シルトで人為堆積とみられ、5～7層は黒色粘土で自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

## 5 . 溝跡と出土遺物

### 2A・B・C号溝跡

3区中央付近で確認された東西溝である。調査区内で総長7.9mを確認した。また、確認調査でも確認されており、総長120m以上となる。方向はE-13°-Nである。溝跡は3時期認められる。最も新しい時期をC期、灰白色火山灰層を含む時期をB期、最も古い時期のものをA期とする。

A期の上幅、深さは不明である。堆積土は3層認められ、黒褐色砂質シルトで、壁側に崩落と考えられる地山土を含む。いずれも自然堆積とみられる。底面の形態は不明だが、壁はゆるやかに立ち上がる。出土遺物には土師器、須恵器の破片が出土している。

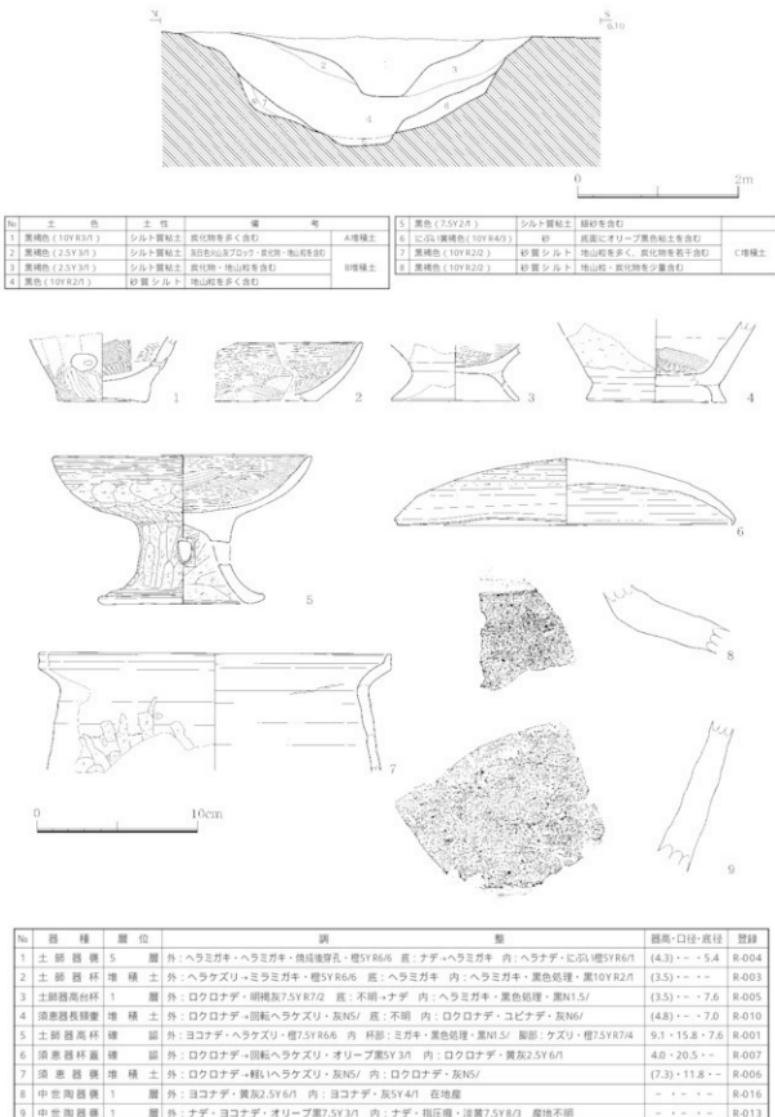


E号溝跡			
No	土色	土性	備考
1	黒色(7SY2/3)	粘土 地山ブロックを若干含む	
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土 腐化物が多く、地山ブロックをまばらに含む	
3	明褐色(2SY2/6)	粘土 黒色地土ブロックをまばらに含む	
4	黒褐色(10YR1/1)	粘土 腐化物・小礫を多く、地山粒をまばらに含む	
5	明褐色(2SY6/6)	粘土 黒色地土ブロックをまばらに含む	
6	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土 腐化物を多く、地山粒を少々含む。植物遺体含む	
7	黒褐色(2.5Y3/3)	砂質シルト 地山粒を多く含む	
8	オリーブ褐色(7SY3/3)	粘土 腐化物・砂を少々含む	
9	オリーブ褐色(9YR3/3)	粘土 地山粒を多く含む	
10	緑黒色(7.5GY2/1)	粘土 地山ブロックを若干含む。植物遺体含む	
11	黒(2.5GY2/1)	粘土 小礫を多く、地山粒を少々含む	
10号井戸跡			
No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR2/3)	粘土質シルト 地山ブロック・腐化物を少々含む。しまりなし	
2	黒色(7SY2/2)	シルト質シルト 地山ブロック(御溝土)を少々含む	
3	褐色(7SYR1.2/1)	シルト質シルト	
4	黒色(7SYR2/2)	シルト質粘土 地山粒を少々含む	
11号井戸跡			
No	土色	土性	備考
1	黒色(7SYR2/2)	シルト 地山土・粘土・腐化物を含む	
12号井戸跡			
No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト 地山粒・腐化物を若干含む	
2	黒色(10YR2/3)	粘土質シルト 腐化物・地山粒を含む	
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト 地山粒多く含む	
4	黒色(10Y1.2/2)	粘土質シルト 地山粒多く含む	
5	黒色(10YR2/2)	粘土 裂け目あり	
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト 地山粒多く含む	
7	黒色(10YR2/2)	粘土 地山粒多く含む	
13号土塙			
No	土色	土性	備考
1	黒褐色(7SYR3/1)	シルト 地山土をまばらに。地土・腐化物を少々含む	
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト 地山土・地土を多く、腐化物を若干含む	
3	褐色(7SYR3/1)	シルト 地土を多く含む	
17号土塙			
No	土色	土性	備考
1	黒褐色(7SYR3/1)	シルト 地山粒・地土を含む	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト 地土を多く含む	
3	ジルコン(黒褐色)10YR5/3	シルト	

第29図 井戸跡・溝跡・土塙断面図

B期の規模が最も大きく上幅4.5m、深さ1.4mである。2~5層はB期のもので黒褐~黒色粘土質シルトでいずれも自然堆積とみられる。2層には2次堆積と考えられる灰白色火山灰ブロックを含む。底面は平坦で、断面はゆるやかに立ち上がる。出土遺物は土師器（非口クロ・ロクロ）、須恵器破片が出土している。

C期は幅3.2m、深さ0.7mである。堆積土は黒褐色シルト質粘土で自然堆積である。底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。2層を切ることから灰白色火山灰下以降と考えられる。出土遺物には土師器、須恵器の破片のほかに中世陶器が含まれる。



第30図 2号溝跡と出土遺物

第30図1は5層出土の土師器甕底部である。体部には孔があり、焼成後意図的に穿孔したものとみられる。須恵器長胴甕(7)はロクロ土師器と同一の製作方法である。1層よりロクロ土師器高台杯(3)、中世陶器甕(8、9)が出土している。中世陶器は内外面ともにヨコナデが施されることから在地産とみられる。また、5、6は確認調査の際、溝跡検出面から出土した土師器、須恵器である。土師器高杯(5)は杯部が低平で段はもたず、脚部は八の字状に聞く中空の脚部をもつ。須恵器蓋(6)は口径20.5cmと大型で、つまみはもたない。

#### 7 A・B号溝跡

2区中央北寄りで検出された東西溝である。溝跡は2時期認められる。古い溝跡をA期、新しい溝跡をB期とする。調査区内で4.9m確認した。方向はいずれもE-21°-Sである。

A期は上幅90cm以上、深さ15cmほどである。底面は平らで壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は1層で地山粒を多く含む黒色粘土質シルトで、自然堆積とみられる。遺物は中世陶器搗鉢口縁部が出土している(第31図7)。在地産とみられる。

B期は上幅85cm、深さ21cmほどである。底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分され、地山粒を含む黒色粘土質シルトで、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

#### 8号溝跡

1区南端で確認された南北溝である。規模は上幅1.45m程で、深さは0.24m程で、地山面から確認された。底面はほぼ平らで壁はゆるやかに立ち上がる。方向はN-33°-Eである。堆積土は2層は認められ、1層は黒色粘土、2層は細砂である。いずれも自然堆積とみられる。溝跡堆積土の上層には灰白色火山灰が堆積しており、溝跡はそれ以前に機能していたと考えられる。溝跡の位置は、南から北に向けて徐々に標高を減じて谷地あるいは湿地に落ち込む地点にあたり、低い湿地部への排水路として機能していたと考えられる。出土遺物は2層より土器の細片が出土したが摩滅のため時期は不明である。

## 6. 土塙と出土遺物

#### 13号土塙

3区中央付近で確認した。平面形は隅丸方形と考えられるが東側壁にかかるため全体は不明である。規模は長軸59cm以上、短軸40cm、深さ15cmである。底面は平らで、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に分層でき、いずれも自然堆積と考えられる。出土遺物は3層から非ロクロ土師器片が出土している。

#### 17号土塙

3区南側で確認した。重複はない。平面形はだ円形であり、底面は皿状で壁はほぼ垂直に立ち上がるが一部でオーバーハングする。規模は長軸64cm、短軸56cm、深さ28cmである。堆積土は3層に分層でき、いずれも自然堆積と考えられる。出土遺物は底面から赤焼き土器杯(第31図8)、堆積土内から須恵器、土師器、スサ入り粘土塊が出土している。

## 7. 表土及び遺構外出土遺物

第31図11は3区北側攪乱から出土した縄文時代の石匙である。9は1区Ⅱ層より出土した近世の磁器高台皿で、内面に染付が見られる。肥前産である。10は確認調査の際出土した土偶である。頭部は三角型で手は短く、胴部以下は欠損する。表面には貼付した円形の隆帯の剥離痕跡、背面には沈線文や刺突文がみられる。迫町糠塚遺跡などで類例がみられ、縄文時代前期とみられる。写真図版11-13-15は縄文土器である。土偶とともに出土した。地紋に縄文を施し、山形文が貼付される。縄文時代前期、大木5式とみられる。

掘立柱建物跡属性表

遺構名	位 置	構造・特徴	規 模 (縦長)	柱 間 (m)	方 向	備 考
14建	2区南端	南北棟	桁行3間 梁行2間	(5.85) 東桁 2.00+1.94+1.90 (2.35) 北妻 1.30+1.00	N18°E	19建より新
19建	2区南端	南北棟	桁行5間以上	(11.80) 西桁 2.25+2.15+2.20+2.25+2.23 梁行1間以上 (2.28+a) 北妻 2.28+a	N12°E	12井・14建より古、抜取痕跡
20建	3区南側	南北棟 縦 柱	桁行2間 梁行2間	(3.80) 東桁 2.12+1.64 (3.22) 南妻 1.48+1.74	N4°W	5溝より新
21建	2区南端	南北棟	桁行5間 梁行不明	(7.38)	1.53+1.49+1.50+1.45+1.50	N16°E

土塙属性表

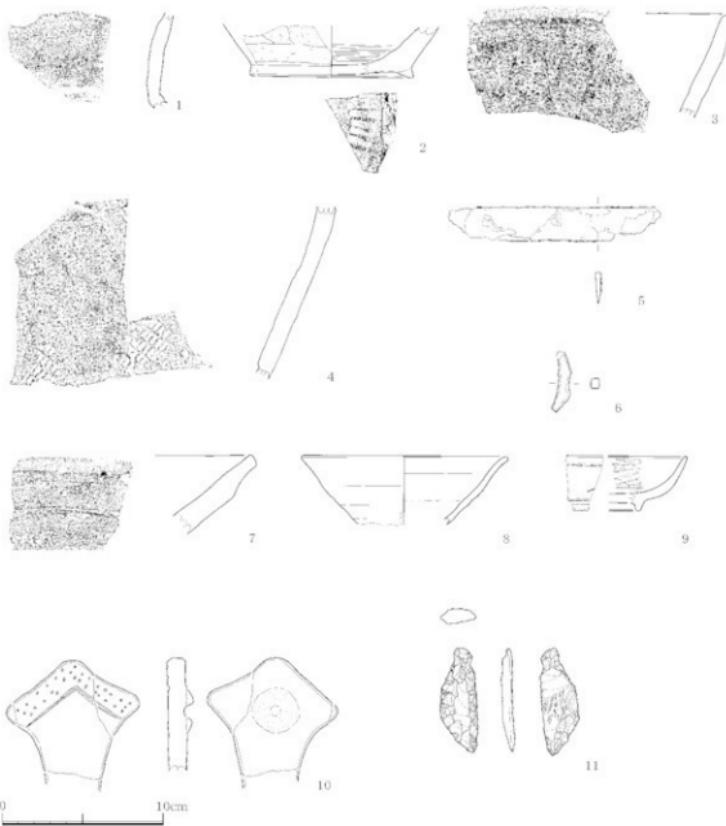
遺構名	位 置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆 積 土	備 考
13土	3区中央	隅丸方形	逆台形	0.6	-	0.4	黒～灰黄褐色シルト(自然)	
15土	3区中央	橋 円 形	U 形	0.9	-	0.3	黒褐色粘土質シルト～明黃褐色粘土質シルト(自然)	16土より古
16土	3区中央	不 整 形	皿 形	1.8	-	0.3	黒色粘土質シルト(自然)	15土より新、2溝より古
17土	3区南側	円 形	箱 形	0.6	0.5	0.3	黒褐色シルト～にぶい黄褐色シルト(自然)	
22土	3区南側	隅丸方形	箱 形	1.3	-	0.1	黒褐色粘土質シルト(自然)	

井戸跡属性表

遺構名	位 置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆 積 土	備 考
9井	3区中央	円 形	円筒形	2.7	-	1.5	上層(人為) 下層(自然)	
10井	3区北側	円 形	円筒形	1.0	1.0	0.9	自然	
11井	3区北側	円 形	円筒形	1.2	-	2.2	上層(人為) 下層(自然)	
12井	3区南側	円 形	円筒形	1.2	1.1	1.5	上層(人為) 下層(自然)	19建より新しい

溝跡属性表

遺構名	位 置	縦長	上幅	下幅	深さ	断面形	方向	堆 積	備 考
2A溝			-	-	-	-		黒褐色シルト質粘土(自然)	
B	3区中央	7.9以上	4.5	0.6	1.4	U 形	東西		灰白色火山灰2次堆積含む
C			3.2	0.5	0.7	U 形		黒褐色砂質シルト～にぶい黄褐色粘土(自然)	中世陶器出土
3溝	3区北側	6.2以上	0.9	0.4	0.3	U 形	東西	黒褐色シルト(自然)	
4溝	3区北側	6.3以上	0.7	0.2	0.5	U 形	東西	黒褐色シルト(自然)	
5溝	3区南側	7.5以上	0.9	0.1	0.1	U 形	南北	黒褐色シルト(自然)	20建より古 段あり
6溝	3区南側	3.3以上	1.2	0.6	0.1	皿 形	南北	黒色シルト(自然)	
7A溝	2区北側	4.9以上	0.8	0.4	0.2	U 形	東西	黒褐色シルト質粘土(自然)	中世陶器出土
B								黒色粘土質シルト(自然)	
8溝	1区南側	3.2以上	1.5	0.7	0.2	箱 形	南北	黒色粘土～黄灰色細砂(自然)	灰白色火山灰層より下で確認



No.	種別	層位	調	型	器高・口径・底径	登錄
1	須惠器長頸甌	9井戸1層 外：ロクロナデ・明青灰10BG7/1 内：ロクロナデ・明青灰10BG7/1	大戸産	- - - -	R-012	
2	須惠器長頸甌	9井戸1層 外：ロクロナデ→ハラケシリ・底N2/底 内：ロクロナデ・灰N6/	(3.2) - - -	10.0	R-009	
3	中世陶器瓶	9井戸堆 外：ナデ・赤褐10R4/4 内：ナデ・暗赤褐5R3/4	在地窯産	- - - -	R-014	
4	中世陶器瓶	9井戸堆 外：ナデ・格子状押印・灰褐灰10YR6/2 内：ナデ・暗褐10YR3/3	常滑産	- - - -	R-017	
5	刀子	9井戸堆 丸輪平造	長:(13.1)・幅:2.1・厚:0.4	R-019		
6	鉢	9井戸堆 断面四角	長:(3.8)・幅:0.6・厚:0.6	R-021		
7	中世陶器瓶	7A清堆 外：ナデ・暗褐10YR3/0 内：ナデ・灰褐2.5YR4/2	在地窯産	- - - -	R-015	
8	赤燒き土器杯	17土坑底 外：ロクロナデ・にぬく(黄褐)10YR7/1 内：ロクロナデ・灰白10YR7/1	(4.3)・12.6・-	R-008		
9	染付皿	1区Ⅱ層 外：染付・灰白 内：染付・灰白	肥前産	3.4 - - -	R-018	
10	土偶	調 表：起深刻痕・黄褐2.5Y5/5 背：盲孔・沈線・黄褐2.5Y5/3	長:(7.0)・幅:(5.2)・厚:1.1	R-020		
11	石	3区埋私 黄刹	長:6.6・幅:2.2・厚:0.7	R-022		

第31図 溝跡・井戸跡・土塙出土遺物

## 8 .まとめ- 遺物と遺構の検討-

今回の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土塙が検出された。ここでは、確認調査の成果も踏まえ、古代と中世について考える。

### [ 1 ] 古代

古代の遺構には、竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 1 棟、土塙 5 基、溝跡 1 条がある。また、8 号溝跡は、時期が判明する遺物は出土していないが、灰白色火山灰降下以前のものであるため、古代の可能性がある。

1 号住居跡からは、カマド燃焼部から小型の土師器甕が出土した。全体を把握することはできないが、その特徴は口縁部が外反し、頸部には軽い段を有し、体部には継位のヘラミガキが施される。このような特徴をもつ土師器甕は、高清水町觀音沢遺跡（加藤・阿部：1980）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川：1982）、栗駒町長者原遺跡（三好：1995）などに類例がみられ、国分寺下層式期（氏家：1957、1967）に位置づけられている。ここでは、他に共伴遺物がないため、8 世紀代と幅をもたせてとらえておく。

2 号溝跡は確認調査でも確認されており、総長 120m 以上の東西溝（第 32 図）で、最大となる B 期では幅 4.5m、深 1.5m である。調査の結果、3 時期の重複が認められ、古代では 2 時期の変遷がある。B 期堆積土には 10 世紀前葉頃に降下したと考えられる灰白色火山灰を含んでいる。出土遺物には非口クロ土師器、ロクロ土師器、須恵器がある。非口クロ土師器で器形が判明するものは 8 世紀代、ロクロ土師器で器形が判明するものは概ね 9 世紀代と考えられる。なお、確認調査時に溝跡上面より須恵器杯蓋、土師器高杯が出土した。須恵器杯蓋は 20.5cm と大型で、つまりはもたない。器形の特徴から涌谷町長根窯跡 A 地点 1 号窯跡（佐々木・桑原：1971）などに類例がみられ、年代は 8 世紀初頭から前葉と考えられる。土師器高杯はほぼ完形であり、低平で丸底の杯部に直立気味から屈曲して裾が広がる脚部が付くものである。杯部は体部から内湾しながら立ち上がるもので、外面に稜はみられない。脚部には橢円形のスカシが 1 個みられる。仙台市郡山遺跡（木村・青沼・長島：1981 ほか）などで類例がみられ、7 世紀末から 8 世紀前葉の年代が与えられている。土師器高杯は、墳墓・寺院・官衙から出土するもので、ほぼこの段階で姿を消すとされる（村田：2000）。下富前遺跡では同時期の遺構が検出されなかったため、遺跡の性格は不明である。今後、周辺の調査を行って遺跡の性格を解明しなければならない。

19 号掘立柱建物跡は桁行 5 間、梁行 1 間以上の大型の建物跡である。柱穴からは非口クロ調整の土師器、須恵器などが出土している。梁行の方向は 2 号溝跡の方向とほぼ一致しており、方向に規制が働いていた可能性も考えられるが、調査区が狭いため、周辺の調査を待って検討したい。

17 号土塙からは底面より赤焼き土器杯が 1 点出土している。体部が直線的に外傾ものである。10 世紀前葉ころのものと考えられる。

### [ 2 ] 中世

中世の遺物が出土した遺構には井戸跡 1 基、溝跡 2 条がある。また、遺物の出土はないが、重複関係や堆積土の状況から、中世と考えられる遺構に掘立柱建物跡 3 棟、井戸跡 3 基がある。確認調査時

にも調査区周辺の各トレーナーでピットや井戸跡などが確認されている。このことから中世には遺跡中央の標高の高い地点、事前調査区の2区南側から3区付近に屋敷が営まれたと考えられる（第32図）。

屋敷に関わる遺構には、小規模の掘立柱建物跡と井戸跡があるが、全体を把握できない。また、屋敷を区画する施設は調査区内では確認されていない。遺構の分布は密ではなく、屋敷は長期間営まれたものではないと考えられる。

2C号溝跡は古代に掘削された2A・B号溝跡が機能を停止した後に中世になってから掘り直された溝跡で、方向は古代の溝跡とほぼ変化がないと推定される。

出土遺物には、常滑産と考えられる甕、在地産と考えられる甕や搗鉢がある。また、表採遺物ではあるが元～明代と考えられる青磁皿が採集されている（佐々木・阿部：1982）。これらの年代は13世紀から14世紀代と考えられ、屋敷の存続年代もこの年代が考えられる。



第32図 遺構分布図

## V .まとめ

1 . 桃生田前遺跡及び下富前遺跡は瀬峰町大里字富桃生田、下富前に所在する。小山田川の左岸に位置し、標高 6 ~ 7 m の微高地に立地している。低地部分との比高差は約 0.70 ~ 1.00 m ほどである。両遺跡は旧河川をはさみ隣接している。

### 《桃生田前遺跡》

2 . 桃生田前遺跡では古代、中世以降の遺構・遺物が検出された。

3 . 古代と考えられる遺構は、竪穴住居跡 4 棟、掘立柱建物跡 1 棟、井戸跡 1 基、土塁 8 基が検出され、調査区の中央から北側に集中している。

奈良時代の住居跡 3 棟はそれぞれ外周溝を伴い、外周溝及び住居跡で重複関係が認められた。カマドはいずれも北壁に付設されており、方向に齊一性が認められる。出土遺物はその特徴から 8 世紀中葉から後半と考えられる。建物跡や井戸跡は方向や配置、重複関係がないことから住居跡と同時期と考えられる。性格が判明する遺構には 4 号住居跡があり、炉壁や鉄滓が出土しており、鍛冶が行われたと考えられる。

平安時代の遺構には 22 号土塁がある。周辺には同時期の遺構がみられないことから、調査区内では居住域として使用されなくなったと考えられる。

5 . 中世以降と考えられる遺構は、掘立柱建物跡、井戸跡で構成される屋敷跡が検出されている。建物跡は 32 棟を検出したが、重複が著しく、具体的な変遷は検討できなかった。また、区画施設なども検出されなかった。出土遺物には中世陶器、木製品、近世陶器があり、出土量は少ない。中世陶器で年代の判明するもの 13 ~ 14 世紀のものである。

### 《下富前遺跡》

6 . 下富前遺跡からは、古代、中世の遺構が検出された。なお、確認調査の際、縄文時代前期の土器片と共に土偶が出土している。

7 . 古代と考えられる遺構は、竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 2 条、土塁 4 基が検出された。住居跡は 8 世紀代と考えられる。溝跡からは 8 ~ 9 世紀ころの遺物を中心に出土している。

8 . 中世と考えられる遺構は、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 1 条、井戸跡 4 基がある。遺物は中世陶器が出土しており、13 ~ 14 世紀と考えられる。中世の遺構はあまり密ではなく、事前調査区周辺に分布しており、比較的短期間に廃絶したものと考えられる。

## 引用・参考文献

- 阿部正光 1982 「瀬峰町三代遺跡出土の土器」『瀬峰町の文化財』第2集 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章 1983 「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章 1984 「瀬峰町大里字富蒲盛出土の戦骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第3集 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章・佐藤敏幸 1987 「瀬峰町泉谷館跡・清水山I 遺跡発掘調査報告」『瀬峰町の文化財』第6集 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章・佐藤敏幸 1988 「下田沢II 遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第6集 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・佐藤敏幸 1989 「民生病院裏遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第7集 瀬峰町教育委員会
- 氏家和典 1957 「東北地方土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 小笠原好彦 1984 「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究』1 考古学篇 清文堂
- 加藤道男 1975 「木戸原跡・宮城県文化財発掘調査報告(昭和48・49年度分)」『宮城県文化財調査報告書』第40集 宮城県黒教育委員会
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 加藤道男・阿部博志 1980 「岩音沢遺跡- 東北新幹線関係遺跡調査報告書IV-」『宮城県文化財調査報告書』第72集 宮城県教育委員会
- 木村浩二・青沼一・長島栄一 1981 「郡山遺跡I - 昭和55年発掘調査概報-」『仙台市文化財調査報告書』第29集 仙台市教育委員会
- 工藤雅樹・藤沼邦彦ほか 1979 「伊豆沼古窯 猿狩A窯跡発掘調査報告」『東北歴史資料館資料集』1 東北歴史資料館
- 小井川和夫・小川淳一 1982 「御駒堂遺跡-東北自動車道遺跡調査報告書VI-」『宮城県文化財発掘調査報告書』第83集 宮城県教育委員会小井川和夫・手塚均 1978 「宮城県文化財発掘調査略報- 穂塚遺跡-」『宮城県文化財発掘調査報告書』第53集 宮城県教育委員会
- 国生 尚 1992 「土鈴集成」『岩手考古学』第4号 岩手県考古学会
- 古代城柵官衙遺跡検討会 1998 「第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集 東北地方の古代城柵遺跡
- 小村田達也 1991 「大嶋八幡遺跡・八幡遺跡- 合戦原遺跡ほか-」『宮城県文化財調査報告書』第140集 宮城県教育委員会
- 小村田達也 1992 「金鉢神遺跡- 金鉢神遺跡ほか-」『宮城県文化財調査報告書』第150集 宮城県教育委員会
- 佐々木茂樹・奥原滋郎 1971 「長根原跡」涌谷町教育委員会
- 佐々木尚見・阿部正光 1982 「瀬峰町の遺跡- 三代遺跡・桃生田前遺跡・下富前遺跡-」『瀬峰町の文化財』第1集 瀬峰町教育委員会
- 佐藤敏幸 1993 「闇ノ入遺跡」河南町文化財調査報告書』第7集 河南町教育委員会
- 佐藤惠幸 1996 「第1章 遺物 1. 土器類(1) 土器・須恵器・赤焼土器 王山遺跡IV- 多賀前地区考察編-」『宮城県文化財調査報告書』第171集 宮城県黒教育委員会
- 鈴木玄雄 1922 「栗原郡藤里村誌」上巻 栗原郡藤里村誌編纂委員会
- 鈴木孝之 1990 「古代・中近世の井戸跡について(1) - 埼玉県における形態分類を中心として-」『研究紀要』第7号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 下山伸昭 1996 「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第1号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 瀬峰町 1966 「瀬峰町史」瀬峰町史編纂委員会
- 瀬峰町教育委員会 1988 「長者原II 遺跡」『昭和63年度宮城県遺跡調査発表会資料』要旨
- 辻 秀人 1984 「東北の横穴と須恵器」『宮城の研究』1 考古学編 清文堂
- 手塚 均 1979 「天狗堂遺跡」『田尻町文化財調査報告書』第1集 田尻町教育委員会
- 東北歴史資料館 1997 「東北地方の土偶」
- 永原慶二編 1995 「シンボリズム 常滑焼と中世社会」小学館
- 野崎 準 1976 「東北地方における須恵器生産」東北学院大学東北文化研究所研究紀要』第6号
- 平間亮輔 1999 「宮城県における律令期の鉄・鉄器生産関連遺跡」『東北地方にみる律令国家と鉄・鉄器生産』鉄器文化研究会
- 古川一明・大田肇ほか 1992 「日の出山窯跡- 詳細分布調査とC地点西部の発掘調査-」『色麻町文化財調査報告書』第1集 色麻町教育委員会
- 三宅宗義・佐藤信行 1975 「がんげ遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第1集 瀬峰町教育委員会
- 三好秀樹 1995 「長者原遺跡」『栗駒町文化財調査報告書』第3集 栗駒町教育委員会
- 三次秀樹・笠原俊哉 1996 「新田柵推定地」『田尻町文化財調査報告書』第3集 田尻町教育委員会
- 村田晃一 1995 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第162集 宮城県教育委員会
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 村田晃一 1997 「陸奥中期にみる北との交流」『娘夷・律令国家・日本海』日本考古学協会秋田大会シンポジウムⅡ資料集
- 村田晃一 1998 「栗原式土器の成立と展開」『考古学の方法』第2号 東北大学考古学研究室
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺- 移民の時代-」『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会

写 真 図 版



・白枠内が範囲  
・この空中写真は建設省国土地理院係の承認を得て、同  
様操作の米軍空中写真を複製したものです。(承認番号  
平12裏複業266号)

図版 1



遺構検出状況（東より）



1号住居跡（東より）



2号住居跡（南より）

図版 2 桃生田前遺跡



3号住居跡（南東より）



3号住居外周溝  
遺物(土鈴)出土状況



4号住居跡（南より）

25号建物跡（東より）



調査区全景（南より）



11号井戸跡（南より）





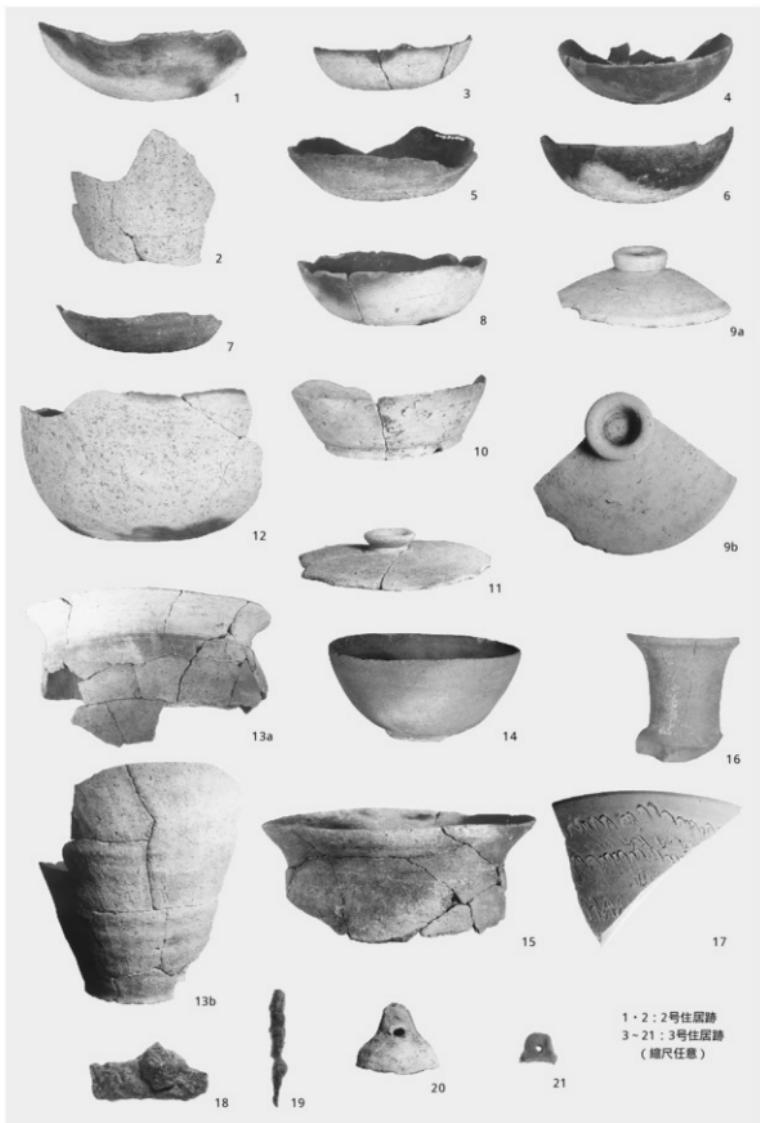
12号井戸跡（南西より）



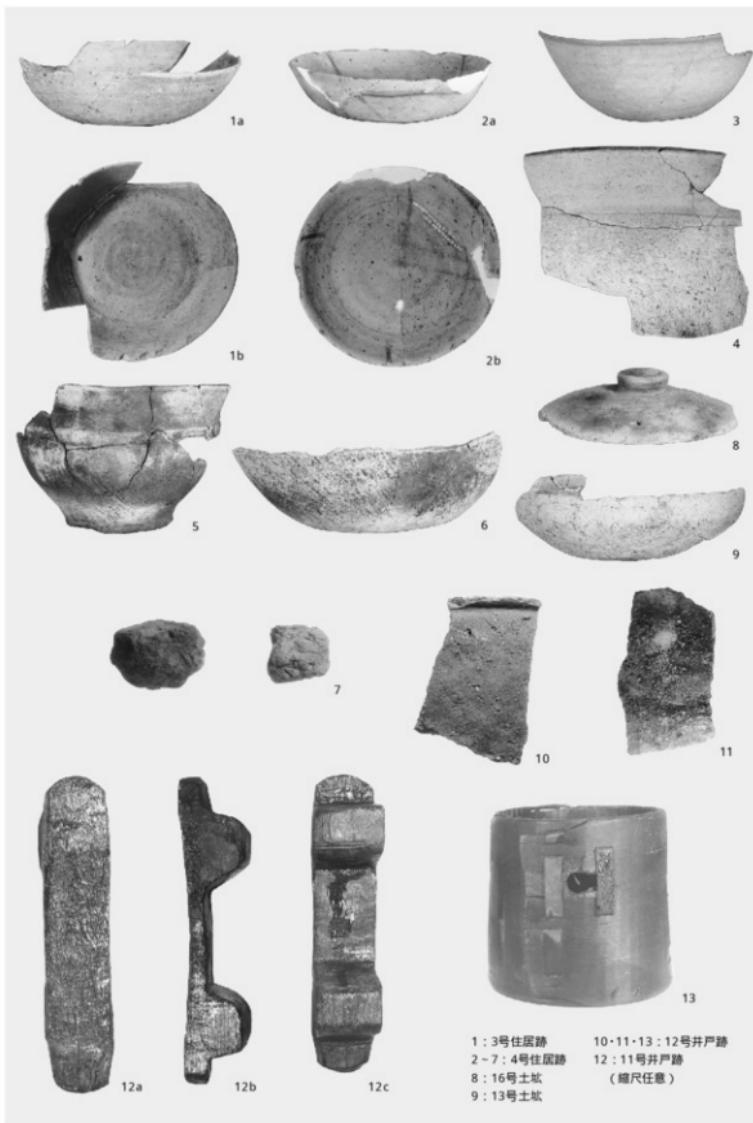
12号井戸跡  
階段状施設（西より）



16号土塙・24号土塙  
(東より)



1・2：2号住居跡  
3～21：3号住居跡  
(縮尺任意)



図版 7

1区全景（北より）



8号溝跡断面（北より）



14・19・21号建物跡  
(南より)



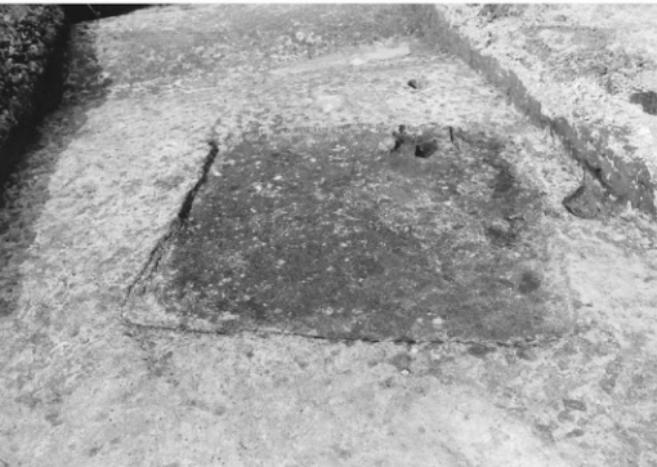
図版 8 下富前遺跡



3区全景（北より）



14号建物跡（南より）



1号住居跡（南より）

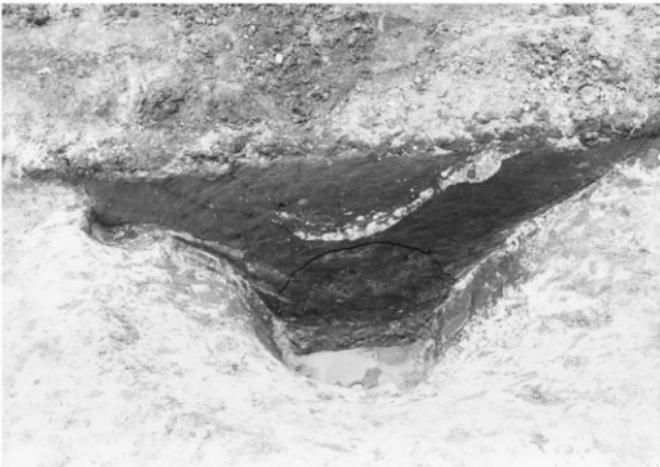
2号溝跡（西より）

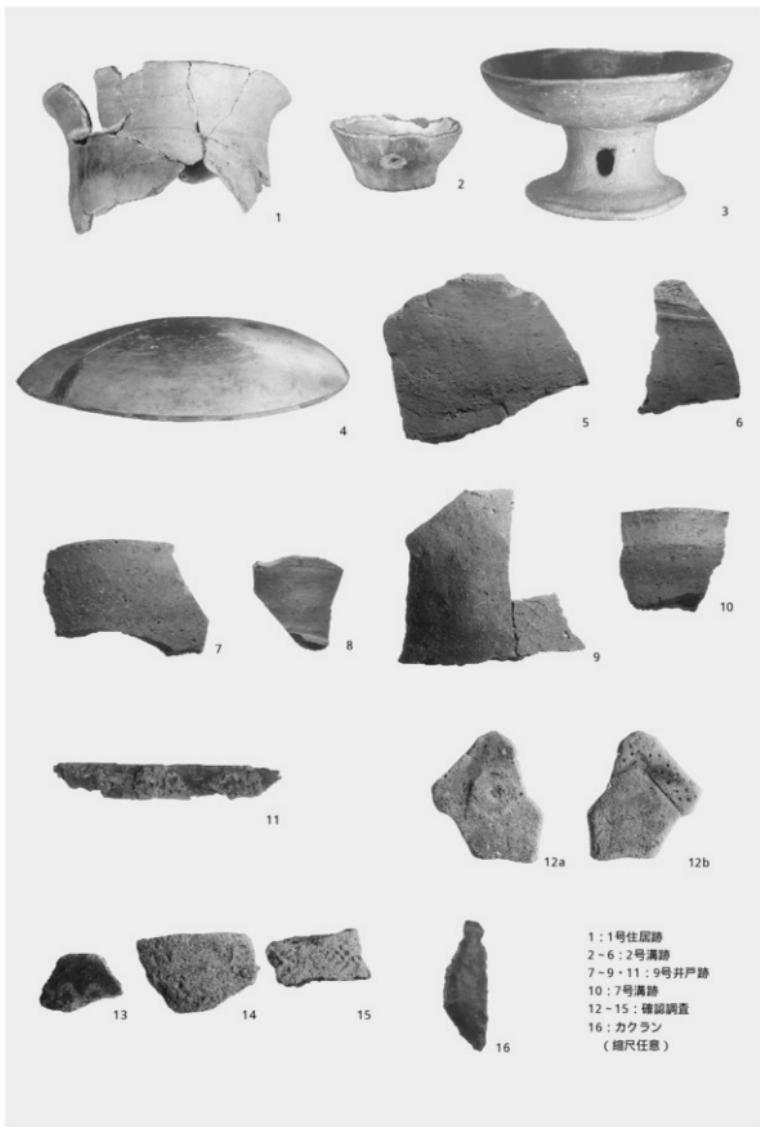


2号溝跡断面（西より）



9号井戸跡断面（東より）





図版 11

## 報告書抄録

ふりがな	ものうだまえいせき・しもとみまえいせき						
書名	桃生田前遺跡・下富前遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	瀬峰町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第19集						
編著者名	安達訓仁						
編集機関	瀬峰町教育委員会						
所在地	〒989-4502 宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1 TEL0228-38-2171・2172						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
桃生田前遺跡	宮城県栗原郡瀬峰町大里字桃生田・下富前	46 046	141°4'00"	38°39'20"	19971212 ~1227	約1,300	県営ほ場整備
下富前遺跡		46 047	141°4'35"	38°38'45"	19990412 ~0609	約780	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
桃生田前遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡	土師器・須恵器 金属製品・砥石			
		中近世	掘立柱建物跡 井戸跡	中世陶器 木製品			
下富前遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 溝跡	土師器・須恵器			
		中世	掘立柱建物跡 井戸跡	中世陶器 木製品			

---

瀬峰町文化財調査報告書 第19集

## 桃生田前遺跡 下富前遺跡

平成12年3月27日 印刷

平成12年3月30日 発行

発行 瀬峰町教育委員会  
〒989-4502 宮城県栗原市瀬峰町藤沢字下田32-1  
TEL 0228-38-2171・2172

印刷 南部屋印刷株式会社  
〒989-2215 宮城県栗原市荒畠町高田一丁目7-36  
TEL 0228-22-2131

---